

阿 島 郭 遺 跡

特別養護老人ホーム喬木荘建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.8

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

阿 島 郭 遺 跡

特別養護老人ホーム喬木荘建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993.8

長野県下伊那郡喬木村教育委員会

序

特別養護老人ホームの建設が飯伊特別養護老人ホーム伝染病院組合により喬木村阿島地区に建設されることが決定されました。

この地は阿島の住宅地内で旧第一小学校跡地であり、阿島郭遺跡に指定されており附近には村指定文化財前方後円墳郭1号墳もあります。更に阿島三千石と謳はれた知久氏の居館跡という歴史的遺産の数多く在る所であります。

このような遺跡であるので建設工事の着工に先立ち、埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果は縄文中期後半の住居址や縄文後期の住居址が多数発掘されました。又その他に墓した先人の人達が日常生活に使用したであろう土器も数多く出土しました。

この地は今は平和な土地となっていますが、古代には河川の氾濫により調査地区的南側約半分の方は河原という状況も明らかにされました。河川の氾濫、食糧の確保、住宅の安全など厳しい自然条件のもとで生活の安定に苦労されたであろう当時の人達の苦労の跡がしのばれました。

この調査は特養建設という大事業を控えての現地調査であり、期間も2月から3月という寒さの厳しい時期短い期間にお願いいたしました。出土した土器類も数多くあり、分類整理報告書作成などに佐藤魁信団長には格別の御盡力いただきました。又、佐藤団長の指示のもとに寒さの中で現地調査に御盡力いただきました調査員、作業員の方々、地域の方々を始め関係者皆さん方の御理解と御協力により調査を終了出来ました事に厚くお礼申し上げます。

平成5年4月

喬木村教育長 下岡重尊

例　　言

1. 本書は、平成4年（1992）旧喬木第一小学校体育馆跡に、特別養護老人ホーム喬木荘が建設されることになり、これに伴い、喬木村教育委員会が発掘調査を実施した報告書である。
2. 本書は、資料提供に重点をおいて編集したものであり、編集は佐藤が担当した。
3. 遺構実測図作成は、佐藤・牧内が、遺物の作成は佐藤が、製図は田口が分担した。
4. 写真撮影は佐藤が担当し、出土石器一覧表は、田口が担当した。
5. 遺構実測図のうち、ピット内、または横の数字は床面からの深さをcmで示し、また遺物出土は床面よりの高さをcmで示し、縮尺は図示してある。
6. 遺物は、喬木村歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序	2
例　　言	3
目　　次	3
挿図目次	4
I 環　　境	5
1 自然の環境	5
2 歴史的環境	5
II 経　　過	7
III 調査結果	10
(I) 遺構・遺物	10
1 住居址	10
(1) 縄文中期後半住居址	10
(2) 縄文後期住居址	19
2 土　　壌	23
3 遺構外の遺物	24
IV 出土石器一覧表	45
V ま　と　め	47
図版	
調査組織	

挿 図 目 次

第1図 郭遺跡地形・位置図、及び周辺主要遺跡図	6
第2図 郭遺跡遺構分布図	9
第3図 郭遺跡20号住居址	11
第4図 郭遺跡22号住居址	12
第5図 郭遺跡23号住居址	13
第6図 郭遺跡24号住居址	14
第7図 郭遺跡25号住居址下層集石	15
第8図 "	15
第9図 郭遺跡26号・27号住居址 土壌Ⅱ・Ⅲ号	18
第10図 郭遺跡19号住居址	17
第11図 郭遺跡15号住居址	19
第12図 郭遺跡16号住居址	20
第13図 郭遺跡17号住居址	20
第14図 郭遺跡18号住居址	21
第15図 郭遺跡28号住居址	22
第16図 郭遺跡土壤Ⅰ号	23
第17図 郭遺跡20号住居址出土遺物(Ⅰ)	25
第18図 " (Ⅱ)	26
第19図 " (Ⅲ)	27
第20図 郭遺跡22号住居址出土遺物	28
第21図 郭遺跡23号住居址出土遺物(Ⅰ)	29
第22図 " (Ⅱ)	30
第23図 郭遺跡24号住居址出土遺物	31
第24図 郭遺跡25号住居址出土遺物(Ⅰ)	32
第25図 " (Ⅱ)	33
第26図 郭遺跡26号住居址出土遺物	34
第27図 郭遺跡27号住居址出土遺物	35
第28図 郭遺跡14号・19号住居址出土遺物	36
第29図 郭遺跡土壤Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ号 遺構外出土繩文中期後半遺物	36
第30図 郭遺跡北公民館南側用地境際出土伏甕	37
第31図 郭遺跡15号住居址出土遺物(Ⅰ)	38
第32図 " (Ⅱ)	39
第33図 郭遺跡16号住居址出土遺物	40
第34図 郭遺跡17号住居址出土遺物	41
第35図 郭遺跡18号住居址出土遺物	42
第36図 郭遺跡28号住居址出土遺物	42
第37図 郭遺跡出土小型遺物	43
第38図 郭遺跡11号・12号・13号住居址出土遺物	43
第39図 郭遺跡遺構外出土繩文後期遺物	44

I 環 境

1. 自然的環境

郭遺跡は、長野県下伊那郡喬木村阿島郭地籍に所在する。標高424.7m～428mを測る。

飯田下伊那地方は、東に赤石山脈が連なり、西に木曾山脈が聳え、その中間を天竜川が南流し、その西側に見事な段丘が発達している。天竜川の東岸——竜東地区は背後に赤石山脈の前面の中山性の伊那山脈が、大西山(1714m)・鬼面山(1889m)・氏乗山(1818m)・金森山(1702m)となって赤石山脈と並走している。伊那山脈の東面は急峻な断崖をなすが、西面は数列の断層による起伏をもちながら段丘面に達しているが、天竜川の西面に比し山麓からびる扇状地は狭小で、段丘面の幅員も全般的に狭いが、豊丘村・喬木村にかけての段丘の発達は著しく、豊丘村の田原・林原・伴原、喬木村の城原・帰牛原・伊久間原、さらに飯田市下久堅の中尾・庚申原と続く伊那谷中位段丘面の幅は広く、典型的な段丘地形を形成している。

遺跡は、帰牛原・城原段丘に挟まれた標高424.7mを測る河岸段丘の北東端部に立地している。南に帰牛原の段丘崖が迫っており、北は200m先に天竜川の支流加々須川が西流し、その両側に郭と寺の前の部落が東西方向に並んでいるが、狭い範囲であり、北側は城原の段丘崖が迫って緩い扇状地形をなしている。

西は比高10mの段丘崖となって下がり、崖下に阿島の町が南北方向に並ぶ。さらに西は沖積面が600m続いて天竜川に達す。

郭の名称は、江戸時代の旗本知久氏の居館が構えられたことによるものである。遺跡の西端には前方後円墳の郭1号古墳があり、旧喬木第一小学校の跡地で、現在喬木北保育園・喬木北公民館があり、これらの間には旧小学校の体育館が残されていた。この体育館が今次発掘調査の中心区域となった。

2. 歴史的環境

郭遺跡は、古くから知られた遺跡である。「下伊那の先史及原史時代」鳥居龍蔵 大正13年によると、図版説明、第一遺跡に「大正11年7月28日、編者の鳥居が喬木村調査の際、同第一小学校では児童をして校庭の大包含地を発掘せしめた。図(図版2)は、アイヌ人厚手土器包含の現状を写真撮影したものである。この校庭は一大包含地で、この時に同校職員及び児童の手に依って発掘せられた土器破片は三十箇のバケツに満る余りの多量であった。その後、更に數箇の大土器片と多くの石器類が発掘された。」とあり、さらにこの図版説明の最初のページに、「大門原・鍾錦原天伯堂に喬木村阿島第一小学校校庭の遺跡を加え、先史時代の本郡三大遺跡と称することができよう。」と、鳥居博士は述べられている。

昭和30年代頃には、現在の喬木北公民館の南側にあった理科園から土器片の出土をみたりし、住居址の存在も予想されていた。昭和49年9月末、小学校の秋期運動会終了後のゴミの埋穴を掘ったところ、土器の出土をみ、埋甕(伏甕)が確認された。(図2参照)

昭和51年、喬木北保育園建設工事中に弥生土器片の出土をみ、緊急調査が行われた。位置は、郭の西端にある郭1号古墳の校舎建設時に破壊された前方部の下部であり、弥生中期前半の寺所式住居址の約2分の1と土壤1基が検出されている。

西端部にある郭1号古墳は、竜東地区唯一の前方後円墳であり、無袖式横穴石室をもち6世紀前半か



第1図 郭遺跡地形・位置図、及び周辺主要遺跡図

ら中葉の築造とみられる。かつての校門であり、現在も残されている石柱の門の位置に郭2号墳があり、校舎建設時に破壊されたが、この時出土した馬具は多く、杏葉・雲珠の完形品もあり、鉄地金網張りの美しいものである。また、帰牛原段丘崖上段部にある郭5号墳よりは、昭和30年阿島大島線の道路改良工事の際、完型の2箇の円筒埴輪（1箇は朝顔花形円筒埴輪）が発見され、注目された。

郭遺跡周辺の村内の主要遺跡をみると（第1図）、北の加々須川を隔てた天竜川氾濫原に近い沖積段丘面に阿島遺跡があり、弥生中期阿島式土器の標準遺跡として広く知られている。同じ北の城原段丘面にある城原遺跡は、弥生後期の遺跡で、鳥居博士の「下伊那の先史及び歴史時代」の先第11回版に追跡と、先生の発掘の写真がのっている。段丘西端部には知久氏の支城城原城跡がある。

郭遺跡のすぐ南の段丘崖上には帰牛原遺跡群がある。数次の発掘調査で、縄文時代では縄文中期後半の集落址、後期の遺構が検出され、弥生時代では、中期初頭の土壙5基が調査され、後期では集落址が調査され、この期の土器の多くと、銅鏡の出土をみている。段丘西端部に方形周溝墓群の発見は注目を引くものであった。

帰牛原段丘南西崖下には、水田址が検出された里原遺跡、縄文前期、弥生中・後期、古墳時代後期の遺物の出土をみている馬場平遺跡がある。里原古墳群は6基とみる古墳があり、その首座とみる里原1号墳は、大規模の円墳とみられ、横穴石室の存在が、池の構築作業中に発見されたが、工事によって破壊された。その時出土した副葬品には四神四獸鏡・玉類・直刀・砥石等があり、出土遺物からみて6世紀中葉に位置づくものとみる。

小川川を隔てた南の段丘上の伊久間段丘面は、有舌尖頭の出土をみ、縄文早・前・中・後・晚期、弥生中期・後期、古墳時代前・中・後期等の各期にわたる大集落が検出され、平安時代・中世の遺構も検出され、伊久間原遺跡群として注目されている。

II 経 過

平成3年、旧喬木第一小学校に残る体育館を壊し、ここに特別養護老人ホーム喬木荘の建設が決定した。前記のように旧喬木第一小区域全体が郭遺跡となっており、昭和52年には、体育館東側にあった校舎跡に喬木北公民館の建設工事がはじまり、この基礎の部分だけが壠られるため、その部分に対し立合調査を8月23・24日に行い、建設面積東西24.5m×南北15mであるが、立合面積は基礎工事幅1mの範囲であった。南西約5分の1と北西隅の1角を除いて、縄文後期以後の加々須川の大氾濫とみる砂疊層の深い堆積となっていた。立合調査で検出した遺構は縄文中期後半の住居址1号～6号址の一部分であった。（第2図）

1. 試 摘

平成3年（1991）の老人ホーム建設決定に伴い昭和52年（1977）の調査結果よりみて、遺構の状態をみるとために、3年10月30日・31日の両日試掘を行った。（写真図版VIの右下）

試掘可能な範囲は、東は体育館の西側に接し、西は保育園の運動場のブランコがあり、この間の幅1m×長さ24mと限られた場所であった。体育館に接して植木があり、根が張っており、また表面は堅く苦労した。

表土下10cmで住居址4軒の存在が認められたが、校舎・運動場建設時に削平され、壁は削りとられていたが床面は固く、住居址は確認された。住居址は11号～14号と前次調査番号の継続でなく、11号住居址より付することにした。(第2図)。

11号～13号住居址は縄文後期中葉の土器と礫か石器の出土をみている(第36図)。14号住居址は縄文中期後半の土器(第28図)の出土をみており、この期の住居址とみる。

この試掘結果よりみて、体育馆を壊したあと用地内の全面発掘をすることにした。

2. 発掘調査

平成4年5月末、体育馆は重機によって壊され、その跡の材木・土台石等も重機によって除去され、相当荒らされていた。

6月4日より、調査にかかり、前年度の試掘時の剖点をきめ、11号～14号住居址の検出にかかるが、重機で踏まれ、遺構は崩れおり残る輪郭をみるとすぎなかった。東の体育馆側は完全に崩され、調査不能となっており、体育馆跡は、砂礫の堆積となっていた。

6月5日 重機により、上層の砂礫の堆積の排除をなす。同時に、建設用の土層の調査を重機で、北東隅I・南東II・南西IIIの3箇所に、 $1.5m \times 3 \sim 4m$ のトレングリ状に深さ2m掘り、Iは黒色層の堆積は深く統くとみられ、II・IIIは表土から2mにわたって砂礫の堆積が更に深く統くとみられ、氾濫堆積とみられた。昭和52年(1977)の喬木北公民館建設に伴う立合調査にみられた用地内の大半が、砂礫の氾濫堆積にみられたと同時期の氾濫堆積であり、用地内の大半に及んでいるものとみられる。体育馆を崩した跡の砂礫層も、この期の堆積とみるものである。

6月6日より本格的な調査にかかる。比較的安定しているとみる運動内にある用地内よりはじめ。上層はジャリをかぶった所もあり、苦労するが、7軒の住居址、土壌1基を検出する。

体育馆跡は破壊工事によるものと、氾濫原により、ほとんど遺構検出は不可能であった。

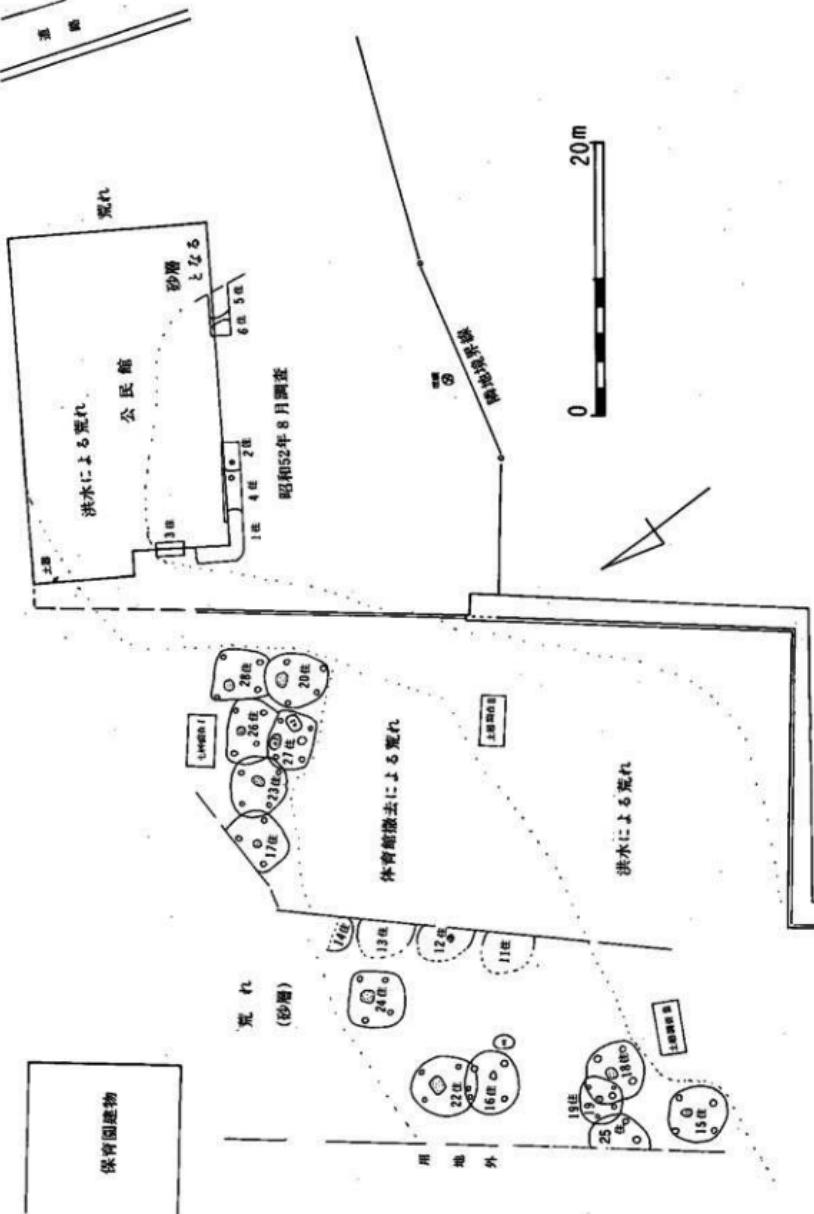
北東側の一辺は安定しており、北側は土層調査Iの黒土層の深い落ち込みとなるが、この一角のみ安定し、東から南に、また西は氾濫による荒れがみられた。ここよりは6軒の住居址と土壌2基が検出された。この北西端にある17号住居址が、土層を知る唯一の安定した状態を示すもの(第13図)であった。

体育馆・運動場建設時に上段よりの土を運ばれ、その際運ばれた縄文中期後半の土器が縄文後期の住居址の上層にのる状態がみられ調査には注意された。また埋土の深いところもあり、混雜した遺物の入り混りがあり、その時期を決めるのも注意して作業をすすめる状態が続いた。

現場作業は7月4日終了した。梅雨の時期となっていたが、雨で作業不能の日は3日、時々小雨の降る日もあったが作業に差し支えはなく、予定通りに作業を終了することができた。

現場作業終了後、遺物の整理・実測、遺構図の整理等をなし、製図する。

報告書作成は他の作業があり、平成5年5月以後とよぎなくされた。



第2図 那須野鹿遺構分布図（注 21号生とみるは、運動場の整地の埋め立てとなり消える）

III 調査結果

今次、郭遺跡で発掘調査された遺構は次のようである。

- (1) 住居址17軒——縄文中期後半7、縄文後期中葉7
- (2) 土壙 3基——縄文中期後半

縄文後期以後とみる氾濫堆積が調査区域の大半を占め、また、体育館の重機による破壊工事によって遺構の消滅も大きかったとみられる。

(I) 遺構・遺物

1. 住居址

(1) 縄文中期後半住居址

郭20号住居址(第3図)

建築用地内の北東端に6軒の住居址が集中検出されている。この東端にあり、北は28号住に接し合い、西に27号住と26号住と隣接している。

南北4.7m×東西4.6mのゆがむ円形をなし、砂質黄褐色土層に38~43cm掘りこむ堅穴住居址である。覆土は表土は削られており、上層は小石を含む黒色土、下層は砂質暗褐色となり、床面となる。床面は堅く、柱穴は同じ大きさの6個が検出されているが、配置からみると主柱穴は5個とみられる。

炉址は中心より北に寄って、北東側に石閉炉の内部に石を敷きつめたものと、西70cmに地床炉がある。

遺物(第17~18・19図・37図の7・15・25)は多く、大半は床面に接していた。

土器は深鉢が主となり、大型と小型がある。大型の文様は、口縁部を横位でめぐる太い沈線、または横位の区画文を四等分する渦文を施す(第17図の8、18図の1)があり、口縁部を2条の横位の隆帯を四等分する2個の山形文で区画する(第17図の1)がある。胴部は荒い斜縄文を施し、半截竹管で縦に直線・波状文を下すものが多く、第17・18図にみる胴部片の大半にみられる。

小型深鉢(第17図の5~7)は、口径16cmの前後で、5・7は口縁部は無文、頸部は凸帯で飾る。特に7は豪華な文様が施されている。6は口縁部を8個の粘土紐の貼布による逆三角形で区画し、その口端部は強く屈曲し、そこにU字状に粘土紐を張り付けて飾る。また逆三角内部を綾杉文で埋めている。

第17図3は、口縁は無文、頭部に二条の隆帯の波状文をめぐらし、肩部は大きく張るとみられ、瘦形ともみられる。18図2は折り返し口縁の無文土器である。

これらの土器は、渦巻文の発達はみられず、伊那独自の縄文中期後半II期に位置づき、本址の主体をなす。

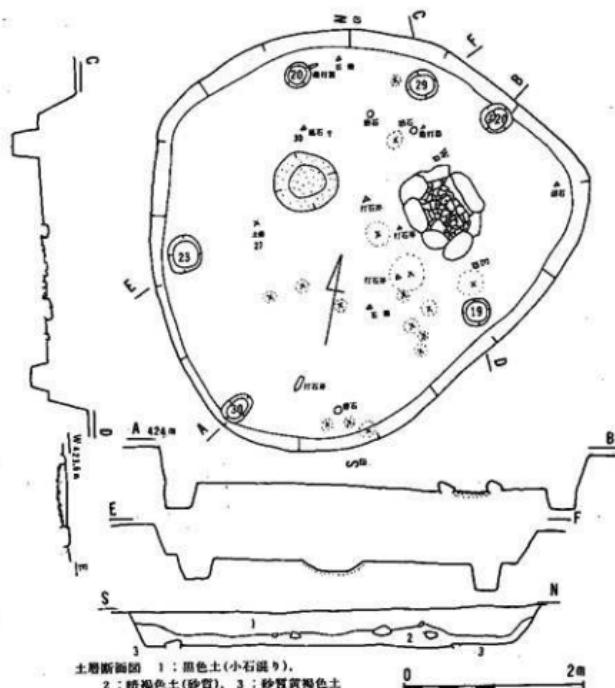
第17図2の土器の口縁は大小の凸越をもち、粘土紐の貼布で飾る深鉢で、中期後半I期の土器の混入である。18図3の口縁の強く湾曲するは東海系の土器とみられる。同図18は台付土器の脚部とみる。

石器(第19図)、石器の種類・数量とも多く、上層から床面にわたって出土をみており、上層から中層の石器には、体育館建設時に上段を削って平らにした時の混入とみるものがある。

打石斧(第19図3~10、24~25)があり、10は中層出土で刃部を欠くが長さ19cm、幅6.5cmあり。

弥生中期の石器である。25は使用痕が著しい。磨石斧には(19図1・11)があり、1は局部磨製石斧・11は乳棒状石斧で刃部を欠く、ともに上層出土で、混入とみられる。

横刃形石器(第17図13~19)があり、いずれも硬砂岩製であり、15以外は梢円形をなし、15は台形



第3図 郡遺跡20号住居址

をなすが、刃部の状態から横刃形石器とみる。敲打器(12)は凝灰岩製で両端端に敲打痕をもつ。磨石(20)は花崗岩製で両面が磨かれている。ともに床面出土である。(28)の磨石は上層出土である。

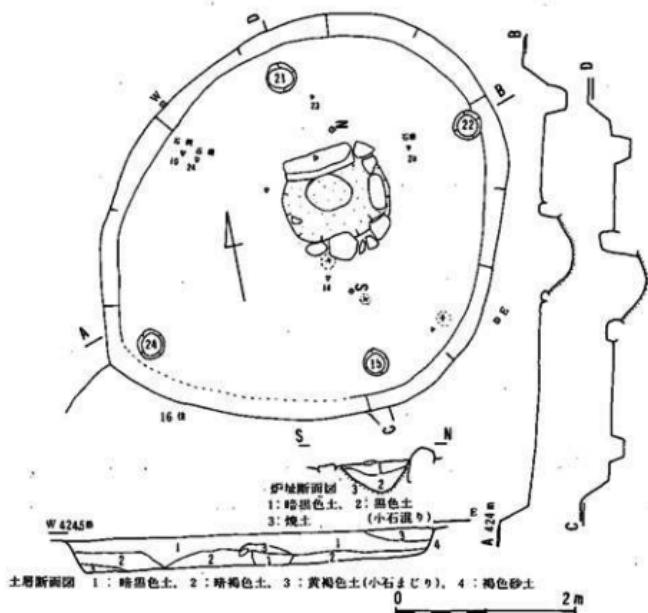
回石は(26・27)の二個の出土をみると、26は西壁にのり、27は床面出土。26は円形・扁平をなし、両面に2個の不自然な凹をもち、27は梢円形・扁平をなし、打痕が一点に集中した凹みをもつ。おそらくドングリ・栗・クルミ等の堅果類の割具をなしたとみる。石鍤(第19図21~23)は硬砂岩製で漁撈具とみられるものである。

第37図15の磨石斧は中層出土で粘板岩製、ノミとみるものである。25は基部を欠き、長さ3cm、玄武岩製で尖頭器とみるが、調製は荒く、時期は不明、上層出土の混入品である。

土製品(第37図7) 土偶脚部片が下層より出土し、脚底部は欠け、荒れている。この住居址に付くものとみる。

第19図2は砥石である。砂岩製で、正面・側面の縁に引かれた沈線は、鐵器によるとみられ、上層出土で、時期は弥生時代以後のものとみられるが不明。上段よりの混入品である。

郭22号住居址（第4図）



第4図 郭達跡22号住居址

建築用地用の西端に接出され、南側の一部に縄文後期16号住居址がある。南北4.4m×東西4.3mのややゆがむ円形をなし、30cm前後褐色砂土に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴4個が壁に沿って配置されている。炉址はやや北東に寄っており、石閉炉で、西側の石ははずされている。北側は長さ80cm、幅25cm、高さ40cmの石を立てている。一辺が1.2mの方形をなし、深さ30cmの掘り込みで、断面図でみると暗黒色・小石混りの黒色土があつて焼土となる。

遺物（第20図・37図の12・30～34）は、比較的少ない。土器で器形を知るものは20図1の深鉢で、波状口縁をなし、口縁の開きはあまり大きくはない。口縁部をワラビ手状文による横円区画文で飾り、頸部に隆脊をめぐらし、その中を籠状具による縦の刺突文で埋め、胴部は縦の太い沈線で区画し、内部に斜繩文を施す。縄文中期後半Ⅲ期の土器で、これが主体をなしている。20図11は台付甌の脚部、37図12はミニチャ底部である。

石器（20図21～27、37図30～34）は、この期に多い打石斧・横刃形石器が各2個と少ない点が目につく。石鏃は上層出土であり、炉址の北側の床面より石皿の出土をみている。37図30のスクレイパー、31の石鏃は上層出土である。37図32～34の石鏃は、上にのる縄文後期の16号住に接した上層よりの出土で、16号住よりの混入ともみられる。

第23号住居址（第5図）

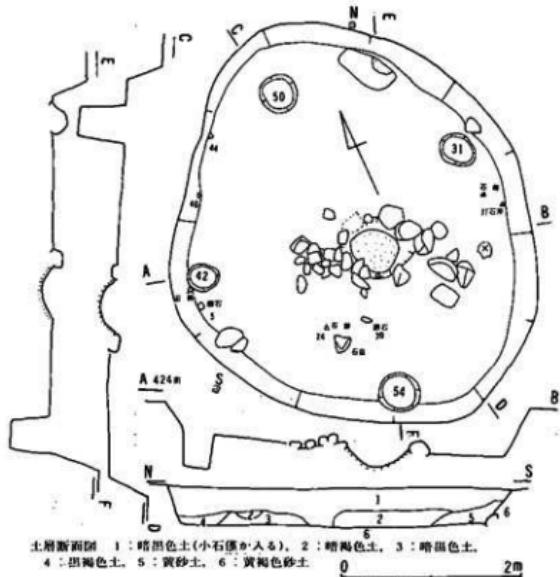
用地北東域に検出され、東に26・27号住と接し合い、西は縄文後期17号住居が東の1部にのる。南北4.3m×東西4.05mのゆがむ円形をなし、黄褐色砂土に東側で55cm、西側で40cm前後掘りこむ竪穴住居址である。覆土（第5図）にみると黑色土、暗褐色土、暗黒色土等があって黄褐色砂土となり、床面は堅い。主柱穴は壁に沿って配置されており、掘りこみは1柱穴を除いて深い。炉址は中心

よりやや南に寄ってあり、石壠炉であったが一部は抜かれており、西側には10数個の石がたまつてあり、東側には4個の石が置かれている。いずれも床面に付いており、何を意味するかは、はっきりできなかった。炉址内部は、焼土が顯著にみられた。

遺物（第21・22図、37図

1・41） 土器は破片のみであり、接しあう縄文中期後半IV期の土器がみられ、26号住とは、掘り込みの深さはほぼ同じで、その土器の混入が多くみられ、また中期後半IIIの27号住の土器も上層より出土がみられた。

23号住の主体となる土器は、縄文中期後半II期とみる。I期に



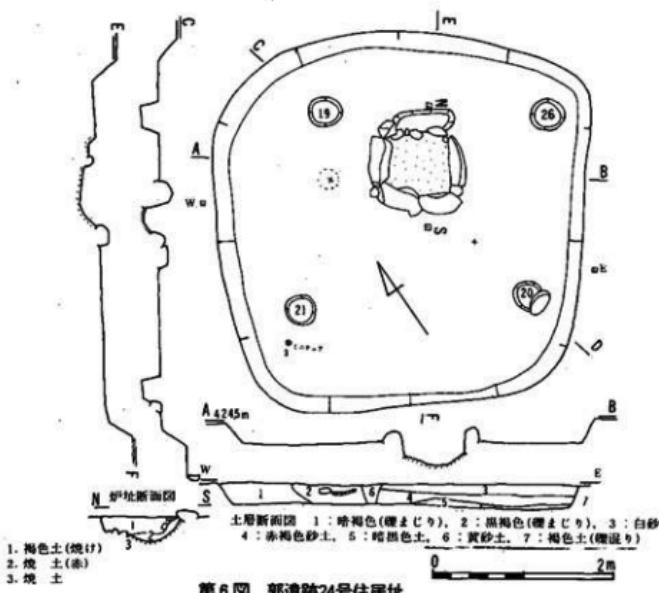
第5図 郭遺跡 23号住居址

みる細い粘土組の貼布によって飾る土器（第21図1・9・10・24・32・34）がみられており、I期からII期へとの連続を思わせるものがある。30・31は26号住よりの混入で、この系統の土器は他に数点みられている。

石器（第22図7～19、第37図1・41）には打石斧（4個）、横刃形石器（1個）と少ないことが目につく。石鎌（3個）、磨石（4個）が上層から床面に出土をみており、床面に石皿1個が出土している。第37図1は中層出土の磨製石斧は定角式石斧で輝緑岩製である。41は石鎌とみるが細長で有舌であり、玻璃質安山岩製である。

郭24号住居址（第6図）

用地内運動場の北端部にあり、南北4.15×東西4.10mの隅丸方形をなし、礎混り褐色土層に25～28cm掘りこむ竪穴住居址であるが、運動場の造成の際、上部が削られ、また盛土されたかして、覆土上層は安定しているとはいえない（第6図土層断面参照）。床面は堅く、主柱穴4個が整った配置にあり、炉址は中心より北に寄っており、石壠炉であったが北側の石は1個の石であったがはずされていた。外周での一辺は110cmの方形をなし、内部の焼土は著しい。



第6図 郭遺跡24号住居址

遺物（第23図・第37図2・35・36）　土器は、渦巻文の発達はみられず、23図1・2・5等にみる斜縞文を主体としており、胴部は縦の隆帯・沈線で区画し、内部を縞文、綾杉文で埋めるが大半であり、中期後半Ⅱ期を主体としている。23図3は細い粘土組の貼布で飾る後半Ⅰ期の土器である。

小形土器（第37図1）は、口経3.6cm、高さ4.6cmで胴部に隆帯をめぐらし、これを六等分して隆帯の上下に穿孔しており、整った器形をなす。

石器（第23図32～39、第37図35・36）には打製石斧・横刃形石器・敲打器・石匙・石錐・石鎋がある。打製石斧は大形で、2個の出土と少ない。また横刃形石器3個の出土も、この時期の住居址としては少ないことが、注意される。

郭26号住居址（第7図）

用地南西端にあり、2分の1は用地外となる。南北径4.3mの円形となるとみる。表土は運動場で固いが、これをはぐと黄砂土に掘りこむ暗黒色土・ついで暗褐色土があり、中間に礫を含む黄砂土層があり、第7図にみる南北方向の集石があり、この間に土器が入りこんで、床面に至っている。下層は暗褐色砂土で堅い床面となる。主柱穴は南壁に沿って1個と、その支柱穴とみるが北は僅か離れて深い掘り込みの穴がみられる。その他の主柱穴は発見されず、炉址も用地外に入っている。

南北方向に向う集石は、おそらく住居廃絶時に屋根の重し石や周囲の石と土器を投げ入れたとみられる。床面出土の遺物は、集石の方向と、その幅に沿って出土していることに注目される。

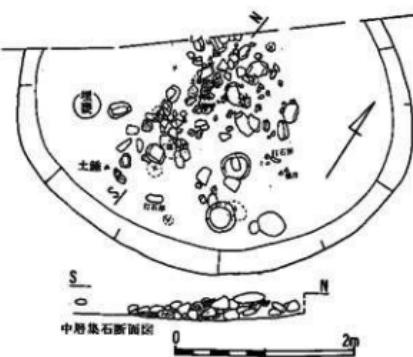
住居址の西壁40cm入った所に埋甕が埋められていた。これよりみて炉址は中心より北に寄ってあったとみられる。

遺物（第24・25図、第37図3～8、20～23） 土器には樽形土器、キャリバー形深鉢を主体とし、樽形土器（第24図3・4・9）があり、3は埋甕、他は床面出土である。隆帯文の区画内に不整円状の区画文をもち、内部を細い沈線で埋める。

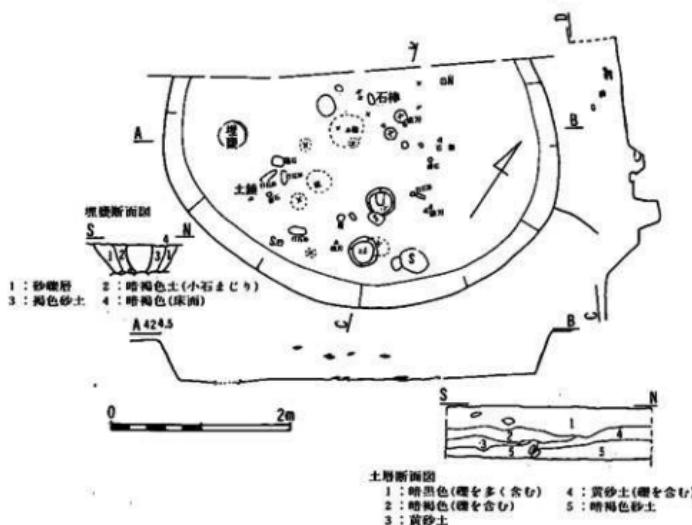
キャリバー形深鉢（第24図1・2・7・8）は口縁部に横円区画文をめぐらし、胴部は綾の沈線で区画し、内部を綾文で埋める7・8、1の脚部を梯状具により逆三角形を描く。

5は大形土器で口縁に横位の太いワラビ手状文をめぐらし、その間に長方形の沈線で区切る区画文を配し、その内部を横に五段に細い粘土紐で区切り、その中を細い粘土紐の波状文で飾る特異な文様をなす。

第25図1・2は橋状突帯付土器である。口縁に接して、1は無文のややゆがむ連続横円区画文による口縁文様帶があり、縁に刺突列点文を施す橋状突帯がつき、さらに円形の把手が立ちあがる。2は、



第7図 郡遺跡25号住居址下層集石



第8図 郡遺跡25号住居址

1と同じ口縁に接しワラビ状文とみる文様をもつ連続梢円区画文が施されているとみられ、縦に刺突列点をもつ橋状突帯がつく。

第25図8は台付壺の脚部で、四箇所に穿孔されているとみられ、孔ははさんで、S字状の沈線がつく。

第37図3のミニチュア土器は集石の南東床面出土で、口縁下に上下に穿孔する隆帯をめぐらし、口縁部に比し胴部がふくらみ壺形ともみられ、黒色を呈し二次的な火にあったとみられ、もうろい。同図4は集石南端はずれの床面より出土し、長さ3.2cm×径1.8cmの円筒形をなし、上部に孔をあけ紐を通してようになっており土錘とみられるが、はっきりしない。同図5～7は土偶片で、5は胴部、6・7は脚部である。同図37～39に土製円板がある。

石器（第25図9～28、第37図37～39）は、積石の中、周辺・集石下の床面に集中して出土をみており、量・器種ともに多い。打石斧は25図9～16があり、9は長さ20cm、刃部幅5.5cm、重量628gの大形である。12は刃部を欠くが重量870gと大きく、繩文後期に出る分銅形石斧の混入ともみられる。他はやや小形であるがこの期の一般的な打石斧である。横刃形石器に18～21があり、24は縦長の石匙である。22・23の石鍤・26の凹石、27の敲打器・28の砥石は砂岩製で小形石器を磨いた砥溝をもっている。37図37～39の石鎧があり、これら石器は繩文中期に多く出土をみ、採集・狩猟・加工に必要な石器の大半が整って出土をみている。25図17は花崗岩製の石棒で西用地境に近い集石下の床面に出土をみた。

25号住居址の時期は、出土土器よりみて繩文中期後半Ⅲ期とみられ、土器は下伊那の独自性をもつものが主体をなしている。

郭26号住居址（第9図）

用地北東端に6軒の住居址が集中する北側に位置し、東に28号住、南に20号住、西に27号住、北面に23号住に接しあっている。直接切りあう関係をなすは、北西の中期後半Ⅱ期の23号住の東端一部を切り、西側の27号住の東側の一部を切っている。東にある28号住とは僅かに接しあう程度である。

東西3.75m×南北は西で4m、東側で4.6mのゆがむ隅丸方形をなし、砂質黄褐色土へ約50cm掘りこむ堅穴住居址である。覆土は上層から中央部は床面にまで小石を含む暗黒色土、下層は西と東側にあって砂質暗黒色土となり床面となり、堅い。主柱穴は4個が配せられ、炉址は僅か中央より東に寄ってあり地床炉であるが、炉に沿って北西側に數個の石がかたまっており、南側にも1個があり、石囲炉であったのがはずされて地床炉に直されたとも思われる。東壁近くには南北方向に4個の石が並んでいる。

遺物（第26図、第37図9・14・18） 土器は破片のみであり、接しあう中期後半Ⅱ期の23号住とは、掘りこみの深さも同じで、その土器（第26図28～36）の混入が多くみられた。

26号住の主体となる土器（第26図1～21）は、結節繩文をもつ中期後半Ⅳ期に位置づくものである。22～25の土器は西に接しあう一時期前の25号住の混入とみる。37の台付壺脚部がある。

石器（第26図39～46）には、打製石斧5、横刃形石器・石鍤・磨石の各1がある。

土製品に39図9の土偶脚部、18の土製円板の出土をみている。

郭27号住居址（第9図）

用地北東端の6軒の住居址の集中する中央に位置し、東は26号住に切られ、北は僅かに23号住の上にのる。南北4m、東西は26号住に切られるが、北東に僅か残るコーナーからみて4m以内の隅丸方

形か、大きくゆがむ円形ともみる竪穴住居址で、黄褐色砂土に約35cm掘りこまれている。覆土は1層の黒色土に東側の一部では床面に達しており、2層の褐色土はうすく床面となる。床面は砂質の黄褐色で堅い。柱穴は4個みられるが配置からみて5または6個とみる。炉址は南西に片寄る、円形の石器炉であり小形である。中期後半II・IIIの炉址としては小さく、出土遺物との関連でみなくてはならない。

住居址内に東側26号住の壁に接して土壤IIが、また南壁に沿う位置に土壤III号が掘りこまれている。

遺物（第27図） 土器は中期後半II期を主体とみるが、上段よりの混入、切合による接しあう住居址の土器もみられ複雑である。

図1の大形深鉢は、炉址南30cmに床上出土であり、一括出土をみると、口縁部と脚部へのつながりではなく、分けて図示した。2~14は床面出土で、中期後半の古い時期もあり、中層出土の15・16は26号住の混入とみる土器である。

石器（27図21~30）には、床面出土に打製石斧がみられないのは異状といえよう。採集・漁撈具とみる横刃形石器（23）・石錐（22・24）がみられるにすぎない。加工用具とみる凹石（26・27）、磨石（25）がある。中層よりは打製石斧（29）・横刃形石器（30）、片面のみの凹石（28）があり、この期の住居址の石器出土については注意される。

27号住居址は遺構のあり方、出土遺物については不明の点が多く、問題を残すものである。

郭14号住居址（第2図・第28図1~7）

平成3年（1991）に老人ホーム建設が決定により、10月調査可能範囲の体育館西側に接した幅1m×長さ24mのトレンチにより試掘を行った。本址はトレンチ北端に検出され、北2分の1は砂の堆積となっており一部調査に終った。

本調査では体育館を削工事によって遺構は破壊され、調査不能となった。このため調査遺構分布図（第2図）に位置を残すのみとなった。

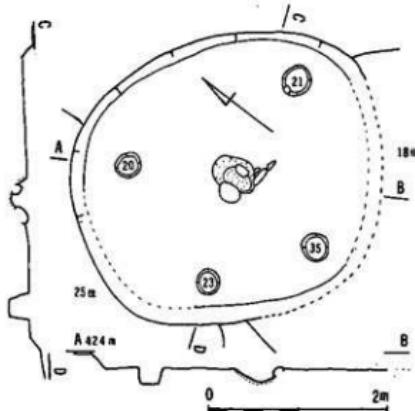
遺物は試掘時に出土した土器（第28図1~7）の繩文中後半III期とみる小破片のみである。

郭19号住居址（第10図）

用地西端に4軒の住居址が集まる中央部があり、西側の一部は25号住の上にのり、東側の約3分の1は繩文後期の18号住に切られている。東西3.2m×南北推定3.45mの円形をなし、砂層に12cm~15cmと浅い掘りこみの竪穴住居址である。残る床面は堅く、主柱穴4個が配され、炉址は、ほぼ中央にあり小形の地床炉である。

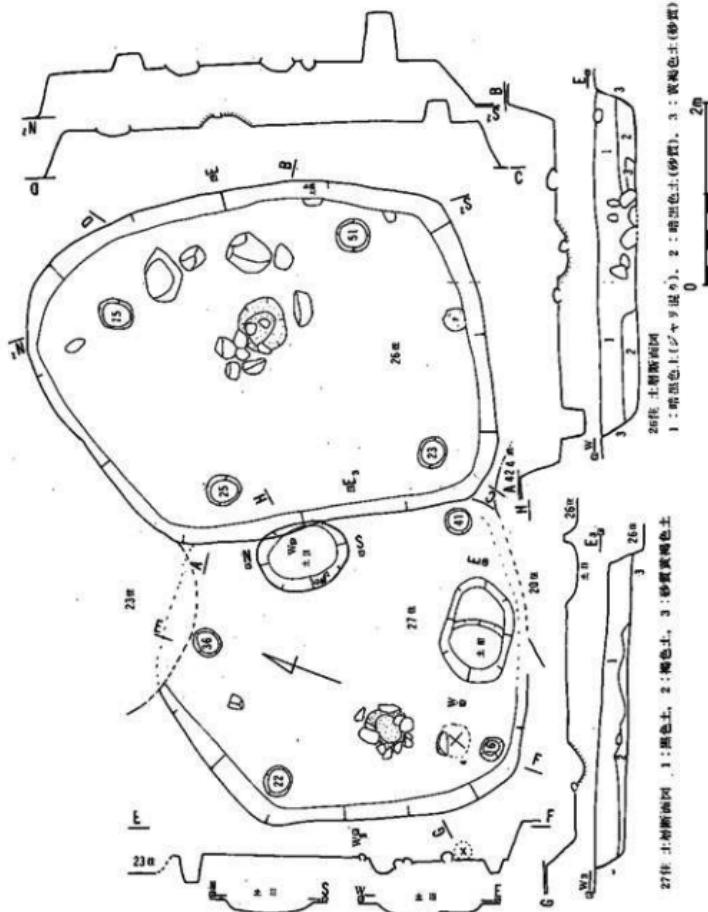
遺物（第28図8~20） 土器の出土は少ない。中期後半III期とみる土器片である。石器には横刃形石器・磨石の各1個の出土をみている。

住居址の3分の1を掘りこんだ後期の18号住の土器は多くみられているが、これらは、混入の土器とみ、18号住居址の遺物とみて処理した。25号住と18号住の両方から切られており、遺物についても十分な検討が要せられる。



第10図 郭遺跡19号住居址

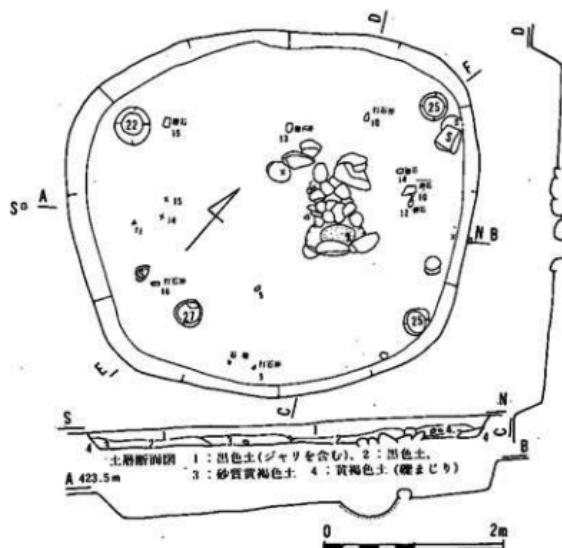
第9図 那須野26号・27号生居址 土塁II・III号



(2) 縄文後期住居址

郭15号住居址（第11図）

用地の最南西端に検出され、これより南西・南東は氾濫堆積の深い砂礫層に埋まる。南北4.1m×東西4.5mの楕円形ともみられ、礫まじり黄砂土に、32cm掘りこむ竪穴住居址であり、床面は堅い。主柱穴は壁に沿って4個が配せられている。炉址は中心より北東に寄っており、石器炉とみるが、西ではなく、東側も僅かに石が切れている。炉址の北に接し北に向く集石がある。



第11図 郭遺跡15号住居址

第32図1～11の上層出土土器も、1部時期が古いとみるものがあるが、床面出土と同時期と大半はみる。

石器（第32図12～23）は、床面出土に打製石斧1・石錐3・横刃形石器・石鎌（刃部欠）1があり、中層より磨製石斧1・大型打石斧（基部欠け）1・磨石3の出土がある。

郭16号住居址（第12図）

西側用地境に接する中央部にあり、北の一部は中期後半の22号住の上にのっている。南北4.3m×東西4.3mのゆがむ楕丸形とも、円形ともみられ、砂礫層に25cm掘りこむ竪穴住居址である。覆土は上層は黒色土、下層から床面に達して暗黒色であるが、部分的に黄砂土や黄褐色砂土の入り混がり、床面下は砂礫層となる。

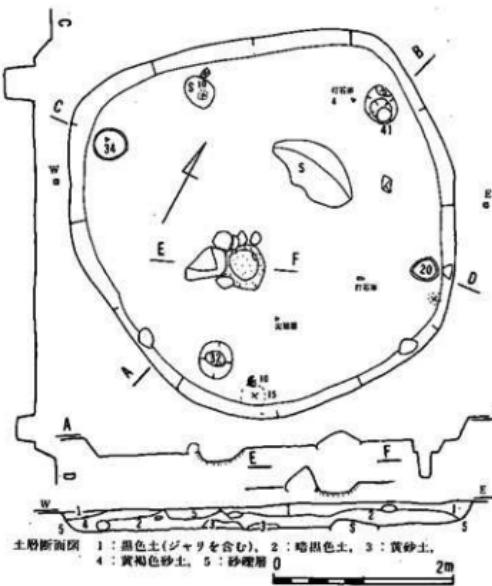
床面は堅く、主柱穴は壁に沿って配置されており、炉址は中心より南によっており、西側には石を配しているが、他は石を配した痕跡はない。炉址の北80cmに大きな石が据えられている。

遺物（第31・32図）は多く出土をみるが、土器は破片のみで、器形をみるものは31図3の台付土器の台部のみであり、他は破片であるが、深鉢と浅鉢が主となるとみる。文様は横位の沈線と磨消繩帯よりなるが主で、無文土器もあり、縄文後期中葉の加曾B式に比定される一群とみる。

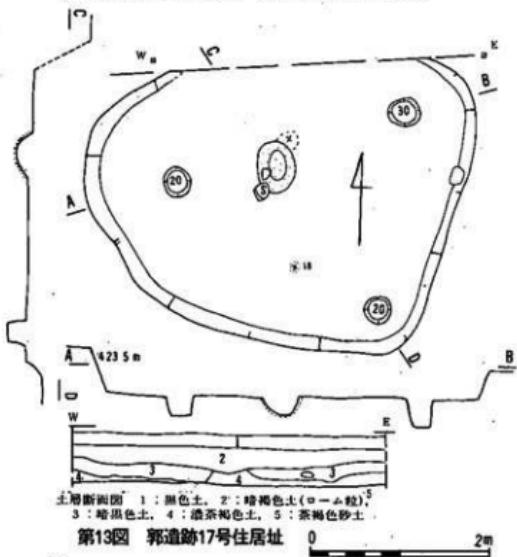
第31図3の台付土器の台部は、最初は浅鉢ともみたが、台部の本体との接着部がはがれた痕跡をもっており、本体の底部とみるは緩い曲線をもっており、台部とみたものである。同図1・14は内面に沈線が描かれる浅鉢であり、2・4も浅鉢で飾られた文様がみられる。9は口縁部を欠く上部に一条の沈線があり、大形の浅鉢ともみられる。8・10～13・15・16等にみる無文土器も多い。

遺物（第33図・37図24） 土器は深鉢と浅鉢がみられ、文様は磨消繩文を横の沈線で切るものが多く、無文・磨消繩文だけもみられる。33図8の大形深鉢は口端部を欠くが、磨消繩文を櫛状具または半截竹管による細い条線を口縁下部からU字状に胴下部まで下ろし、一部には縦の波状文を平行に下げている部分がみられる。同図12・13・17等は同一個体とみる。18・19は炉址内出土であり、23・24は柱穴内出土である。大形浅鉢は口縁を欠くが、外面は無文となるが、この期の一般的にみられるものであり、本住居址出土土器は繩文後期中葉加曾利B式に位置づくものである。

石器は33図26・27の打製石斧があり、第37図24は尖頭器とみられ、基部を欠くが長さ3cmあり、黒曜石製、床面出土であるが、この期のものとは思えない。この石器については、郭遺跡のこれに類する石器の出土をみており今後の課題といえよう。



第12図 郭遺跡16号住居址



第13図 郭遺跡17号住居址

郭17号住居址（第13図）

用地北東端の1群の住居址中の北端に検出され、北3分の1近くは盛土のため調査不能となった。東西4.3m×南北推定3.7m位とみられ、ゆがむ隅丸方形をなすとみられる。黄褐色砂土に25~50cm掘りこむ堅穴住居址である。北側の盛土塊の土層断面調査図であると、上層は黒色土、2層は暗褐土(ローム混り)、3層は暗褐色土で一部は床面に達し、最下層は濃茶褐色土で床面となる。今次調査の造構のはほとんどは上層は擾乱により荒れており、17号住の断面は本来の状態を示す唯一のものといえよう。

床面は堅く、柱穴は3個発見されているが、主柱穴は配置からみて、4個

とみる。炉址は中心よりやや南に寄つてあるとみられ地床炉である。

遺物（第34図・第37図16・17） 土器には、深鉢・浅鉢・注口土器・壺がある。深鉢には無文が多くみられ、磨消繩文は僅かにみられるにすぎない。貝殻による条痕をもつて3・21がある。9の把手は後期中葉以後にみられるものである。注口土器は注口部破片（17），7の壺は精製土器で朱彩されており、注口土器ともみられる。土器は後期後半の地方色をもつものとみる。

上層から中層出土の12～15は、黒色の地肌をなし精製されており、半截竹管によるとみる、やや深い沈線を弧状に、横位、斜位に引いており、同一個体とみられ、上段よりの入りこみの土器である。土製品に第37図16・17の土製円板がある。土器片を加工したものである。

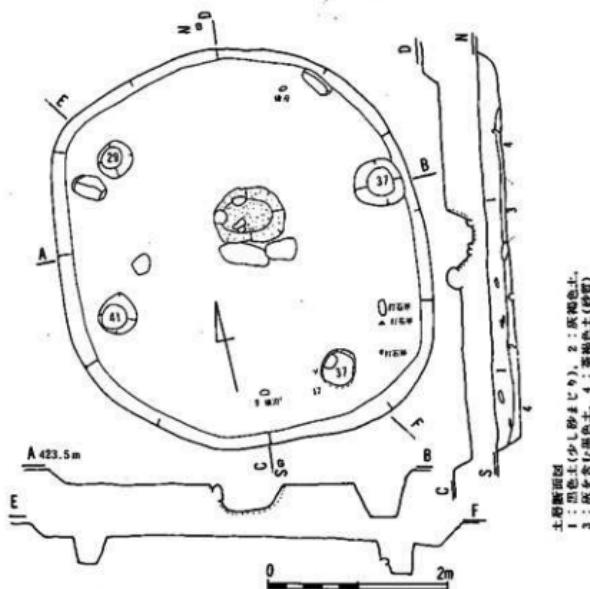
石器は少なく、34図の24の打製石斧・25の横刃形石器・24の敲打器の出土をみたにすぎない。

郭18号住居址（第14図）

用地南西端部にあり、中期後半の19号住の南側の3分の1を切っている。南東側から東西方向の一帯は氾濫の砂礫層の深い堆積となっている。

南北4.4m×東西4.1mの、隅丸方形ともみられる円形をなし、黄褐色砂土を20～25cm掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4個が壁に沿って配せられ、炉址はやや北に寄つてあり、地床炉ともみられるが、南側に炉に沿つて2個の横長の石が置かれている。

土層断面図でみると、上層に砂まじりの黒色土があつて下層は灰褐色土があり、床面となる。上部は運動場整地の際に削られ、覆土は浅くなっているとみる。



第14図 郭遺跡18号住居址出土遺物

遺物（第35図・37図29） 土器の出土は少なく、中期後半の19号住を切っており、これの土器が多く混じっていた。本址の土器は鉢が多くみられ、後期中葉後半とみられる。石器には打製石斧2、横刃形石器・石錐各1と第37図29の石鎌がある。

郭28号住居址（第15図）

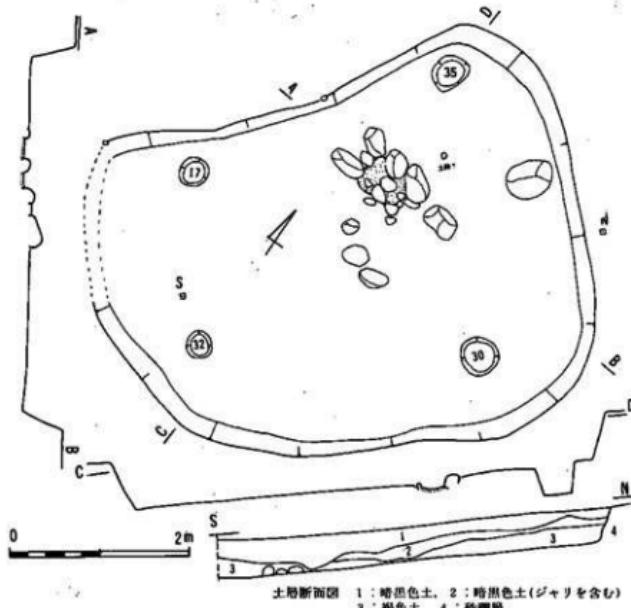
用地北東端に6軒の集中する住居址の東端にあり20号住の1部を切っている。上層よりは中期後半の土器が多くみられ、住居址の切り込みの状態をはっきり示した20号住の調査を先行したため、1部壁が切れている。

南北5.5m×東西3.6～4.4mの大きくゆがむ長方形をなすとみられ、砂礫層に約50cmと深く掘りこむ竪穴住居址である。覆土は、土層断面にみると、上層に暗黒色土、次いで北から南へ下がるジャリを含む暗黒色土があり下層は褐色土で床面となる。

床面は堅く、主柱穴は4個、壁に沿って配されている。炉址は、中央より北西に寄ってあり、石圓炉とみるが不規則であり、廃絶時に崩されたともみられる。

遺物（第36図、37図10・40） 遺物は、下層から床面出土で、上層には中期後半の小土器片があるが、体育馆建設の際に上段の傾斜面を崩した土を入れたもので、その時に運ばれた中に含まれた土器片であり、一部を第29図17～24に掲載した。

下層から床面の土器は、後期中葉加曾利B式を主体とみるもので、1・2は深鉢の把手とみられる。石器には、打製石斧2・石錐3・石鎌1の出土をみている。



第15図 郭遺跡28号住居址

土製品に第37図10がある。球状をなすが底部を欠く。精製され、文様は中央帯を両端を細い沈線で区画しその間にラバビ手状文をめぐらす。両側に半截竹管の押引状文を施し、両端は渦文で飾る。器壁は厚く1cm余あり、器の直径は5.5cm、形態からみて土鉢とみたが、ご教示をねがいたい。

郭11号・12号・13号住居址（第2図・図版1の3）

平成3年（1991）に老人ホーム建設に伴う用地内の遺構状態を知るための試掘を10月実施した。調査可能範囲の体育馆西側に接して、幅1m×南北長さ24mのトレンチを設定、調査を行う。4軒の住居址の存在を確認する。最北に中期後半の14号住があり、2分の1より北は深い砂層となって調査不能となる。14号住の南に13号住、12号住、11号住と並んで検出された。床面は堅く、壁は運動場設置の際表土削平のため壁は削りとられていたが、南北の住居址の境は、床面の状態で知ることができた。12号住には炉址が検出されたが、崩されて不明となる。

本調査にかかるが、体育馆を崩すのに重機によつたため、遺構は破壊され、調査不能となつた。このため試掘時の位置を示す図を第2図に掲載した。

遺物（第38図・37図27・29） 土器は少ないが時期をはっきり示すものが多い。11号住は1～6の土器と、37図の29の石鎌がある。

12号住は第38図7～11の土器と12の石縫、37図26の有舌の石鎌の出土をみている。

13号住は第38図13～18の土器がある。

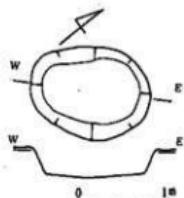
この3住居址の土器には共通性がみられ、縄文後期中葉加曾利B式に位置づくものでありこの期の住居址とみたい。

2 土 壤

郭土壤I号（第16図）

16号住居址の東に隣し、南北1.35m×1.0mの楕円形をなし、砂疊層に深さ30～35cm掘りこむ土壤である。

遺物（第29図1～11） 土器片のみで、縄文中期後半II期の土器が主体をなすとみるが、土壤上部は木の根があり、縄文中期後半以後の土器の混入もみられる。



第16図 郭土壤I号

郭土壤II号（第9図）

用地北東端地区にある。27号住居址の北東内に掘りこまれ、東端の1部は、26号住に接する。南北1.05m×東西0.75mの楕円形をなし、27号住床面より15cm掘りこまれている。

遺物（第29図12～14、第37図14） 土器は縄文後期とみる磨消繩文を沈線で切るもので中葉期の土器とみる。石器に第39図14の縦長の玄武岩製の石匙が西壁の下部より出土し、27号住のものとみるが不明。

郭土壤III号（第7図）

27号住居址の南壁近くに東西に軸をもち、東西1.15m×0.77mの楕円形をなし、西側は深く二段の掘りこみをなし、西は15cm、東は12cmと27号住の床面に掘り込んでいる。

遺物（第29図15） 15の横刃形石器の1個のみであるが、縄文中期後半の土壤とみる。

3. 造構外の遺物

遺物は、用地北東端部の上層出土である。体育館を破壊したあとを重機によって片付けをした直後、小学生が学校帰りに採集した土器で、担任の先生が集めておいてくれたものである。

縄文中期後半の土器（第29図17～24） 出土量は多く、ほとんどが小片で、図示したのは僅かである。後半Ⅲ期を主にしているが後半各期にわたっており、体育館建設の際上段の傾斜面を削って盛土した時に混ざった土器とみる。

上段には、前小学校の校舎一棟があり、これを崩したあと北部公民館建設時に立合調査によって縄文中期後半住居址 6軒（第2図参照）の存在を確認した。土器は小片のみであった。

昭和49年9月には小学校運動会後のゴミ埋穴を掘った際に出土をみた状態（第30図）は完形で高51cm、口径41cmの中期後半の深鉢である。この様に上段の中期後半の造構・遺物をみた現在、削平される前の傾斜面の土器の混入は当然考えられる。

縄文後期中葉の土器（第39図） 多くの出土をみたのは、最北東端の土層調査Ⅰの周辺上層よりも、この南側の6軒の住居址と周辺の上層よりである。前者は黒色土の堆積層であり、後者の住居址の掘りこみは深く、上層の土層との関連は少なくないとみられる。このようにみると、上段よりの土に混じって運ばれたことも考えられる。かつて小学校の理科園であったところを耕すと後期土器片がみられ、後期住居址の存在も予想されていた。また、一方では、北端の黒土層の上層から中層に後期の造構のあったとも考えられる。採集された土器片の多くはここより採集されている。

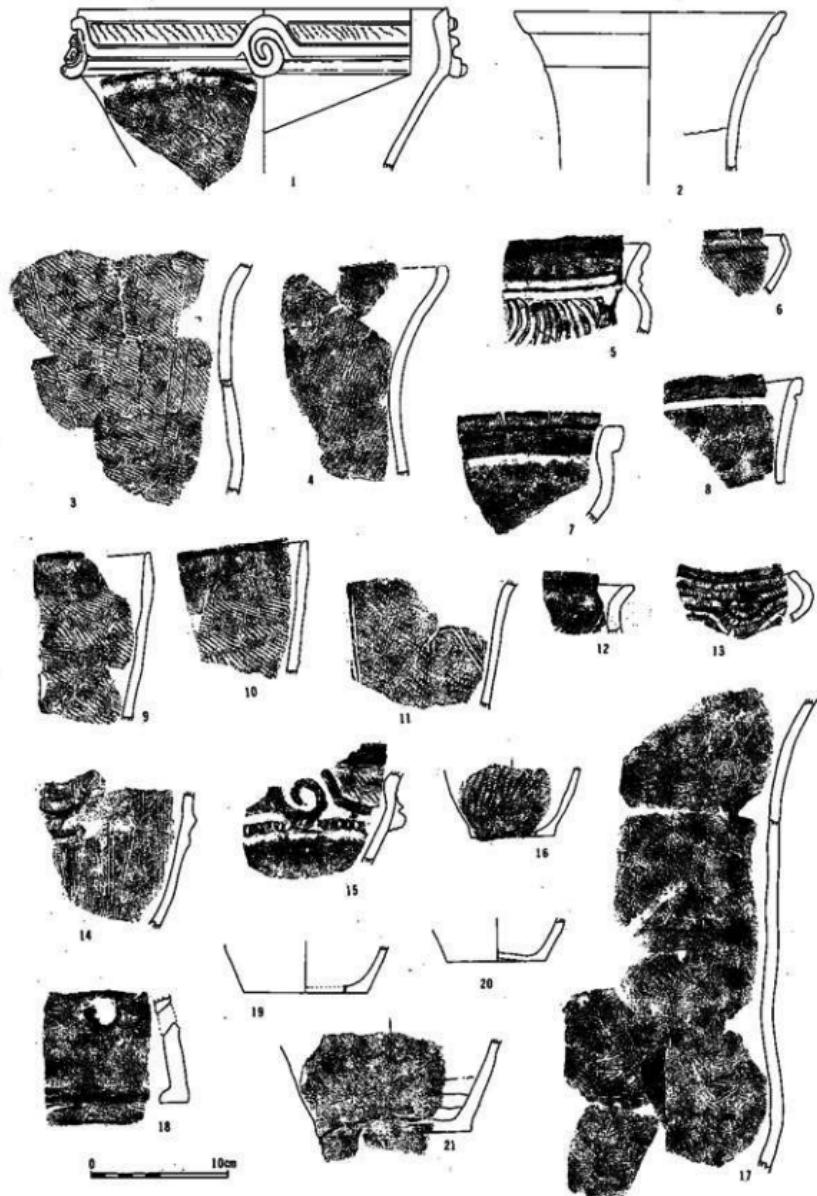
土器は、後期中葉加曾利B式が主体となり、深鉢・浅鉢・注口土器がある。39図の10・11の把手は浅鉢に付くとみられ精製されている。12は、巻貝の側面圧痕文が施され、22は表面はこまかい磨消繩文が裏面に巻貝の圧痕文が施され、東海系の後期後葉にみられるものである。

33は注口土器の注口部であり、34の底部はアジロ底をなしている。土製品に32の土偶脚部があり、そのまがり方は中期後半の脚部とは異なる。上段よりの土器・また中期後半の土器の混入があり、問題をもつ遺物である。

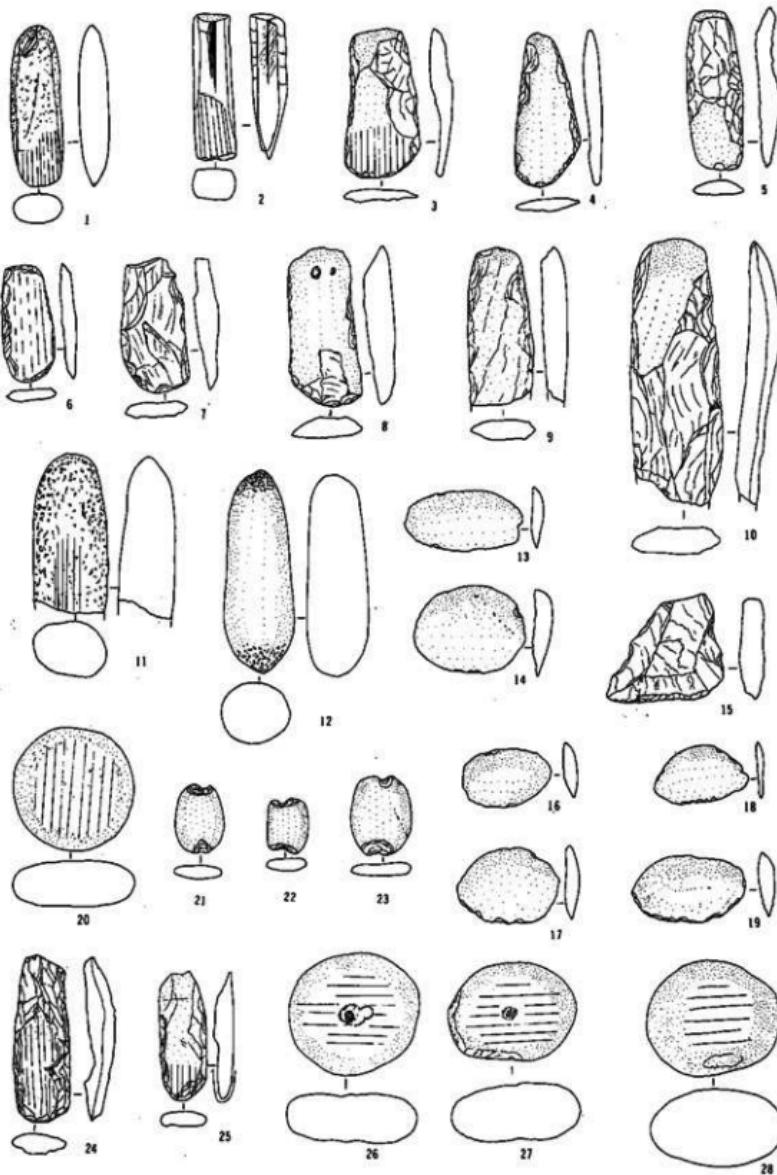
中世・近世の遺物（第37図42・43） 42は紹聖元年（1094年）の宋銭であり、中世から近世初頭までみられている。43は輝りのある灰釉がかかる小皿ともみるが不明である。高台は内湾する小形のものであり、近世美濃産とみられるもので、今次調査でみた知久氏館址でみた唯一の二点の遺物である。



第17図 郭遺跡20号住居址出土遺物（I）

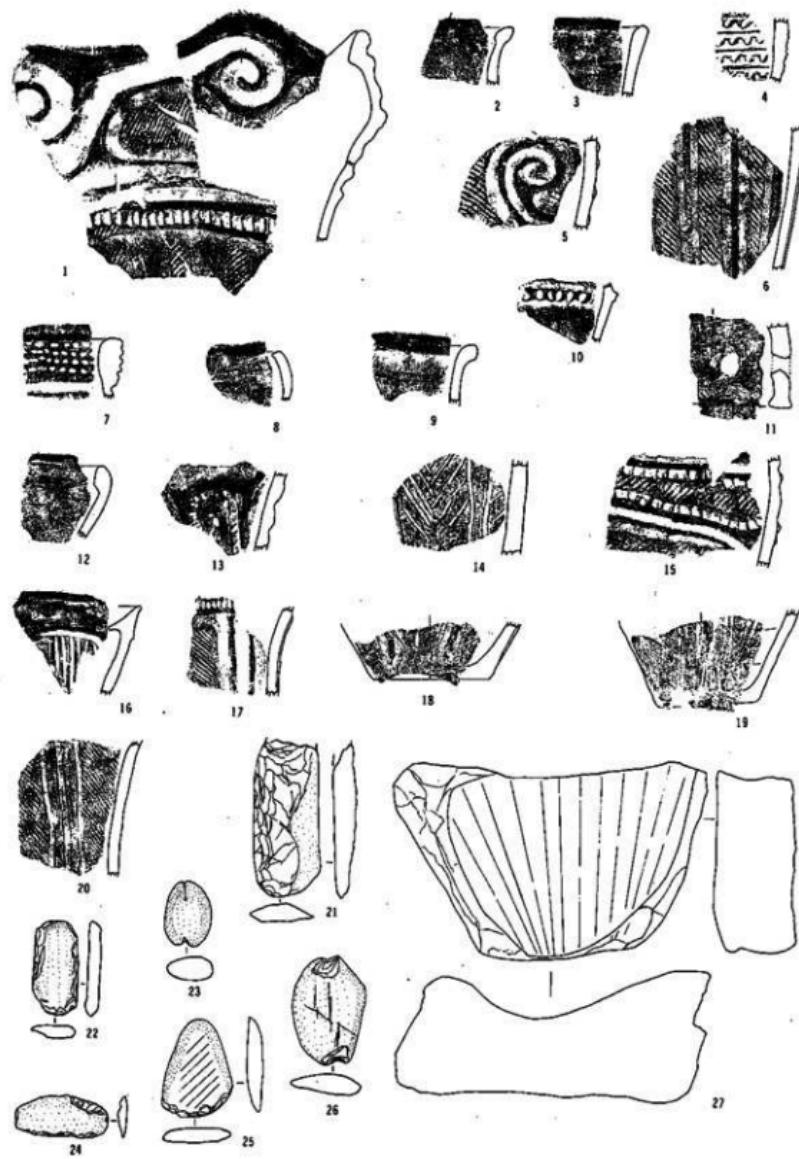


第18图 邦遗址20号住居址出土遗物(Ⅱ)



3～5・8・9・12・13・15・20～25・27…床、7・14・16～19・24・25…下層・床
1・2・6・11・28…上層、26…西壁上

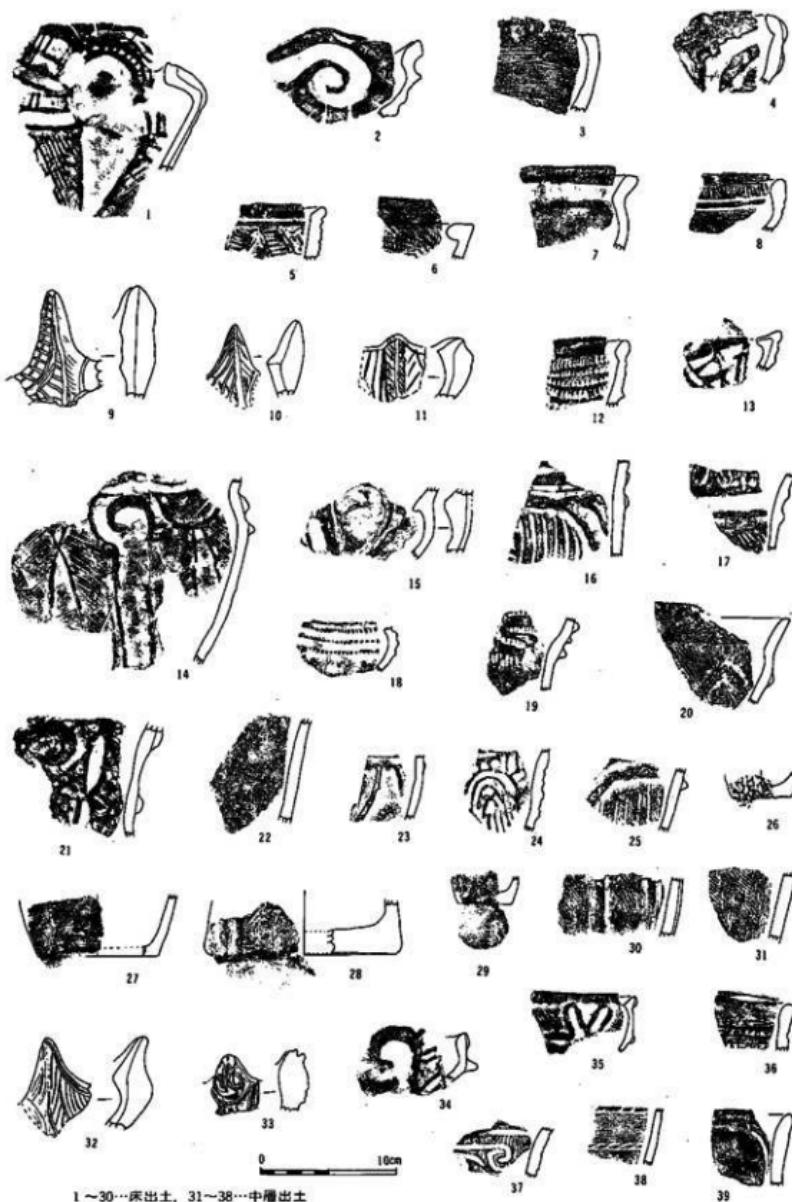
第19図 郭遺跡20号住居址出土遺物(Ⅲ)



—1~11·27—床·炉址。12~26··下·中层

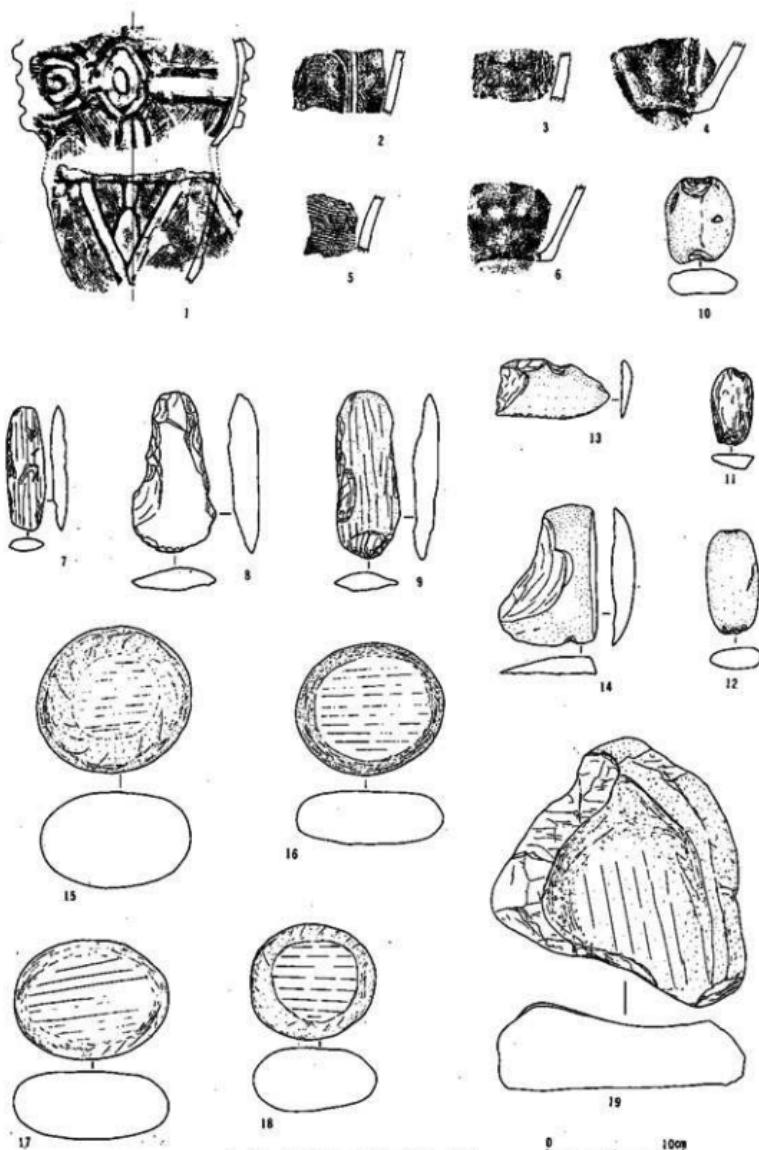
0 10cm

第20图 郭遗踪22号住居址出土遗物



1~30…床出土。31~38…中層出土

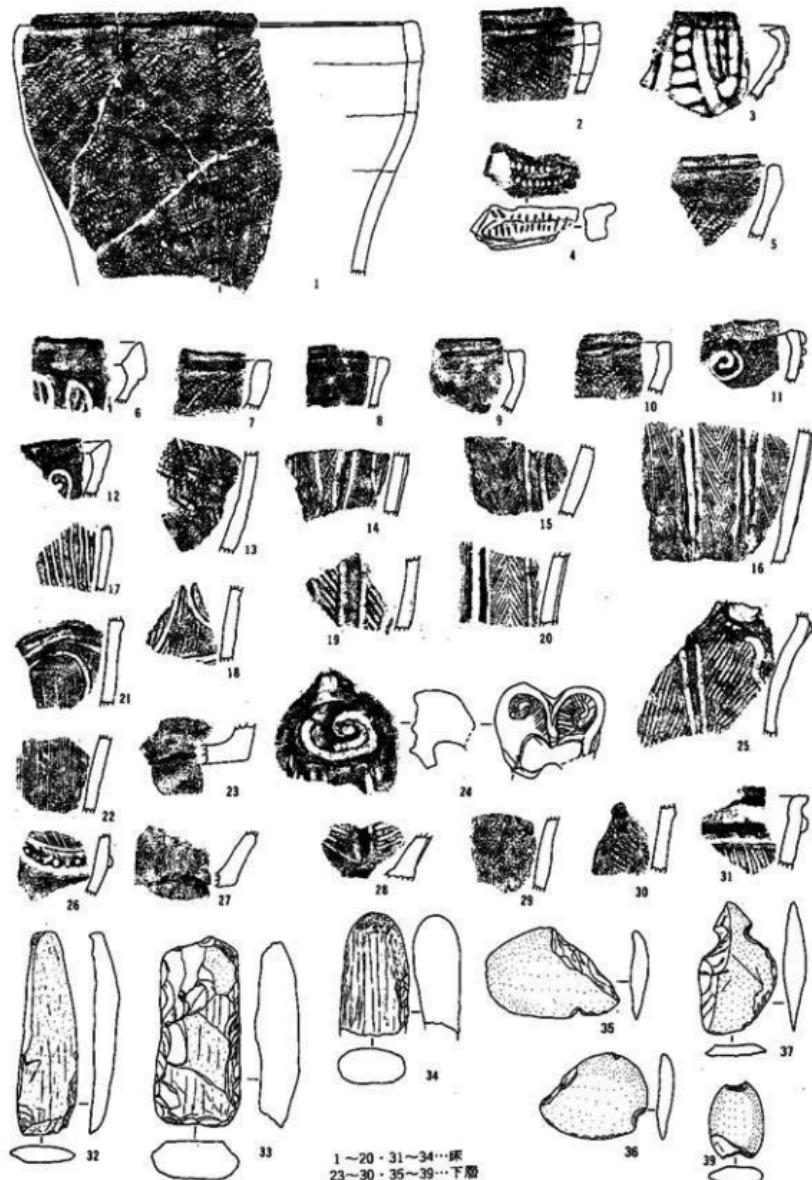
第21図 郭遺跡23号住居址出土遺物（I）



1~6…中层出土，石器…下层・床面

第22图 郭追路23号住居址出土遗物(Ⅱ)

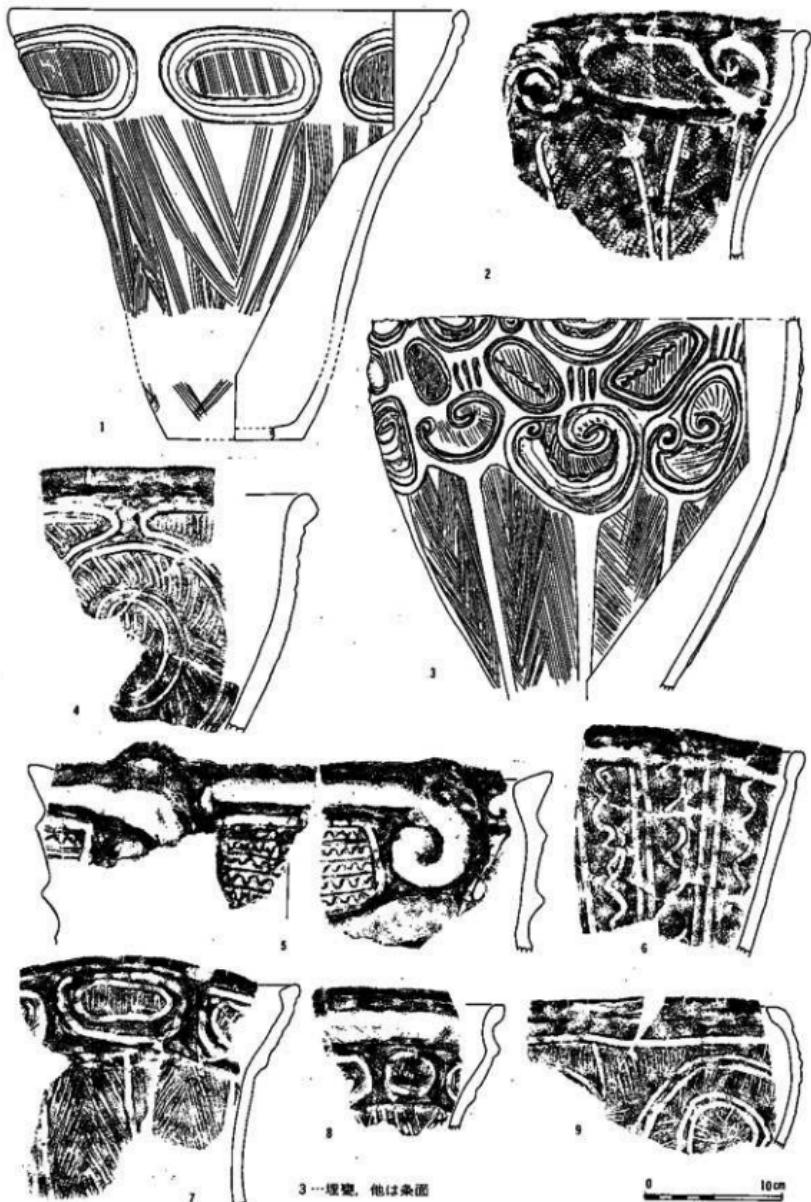
0 100



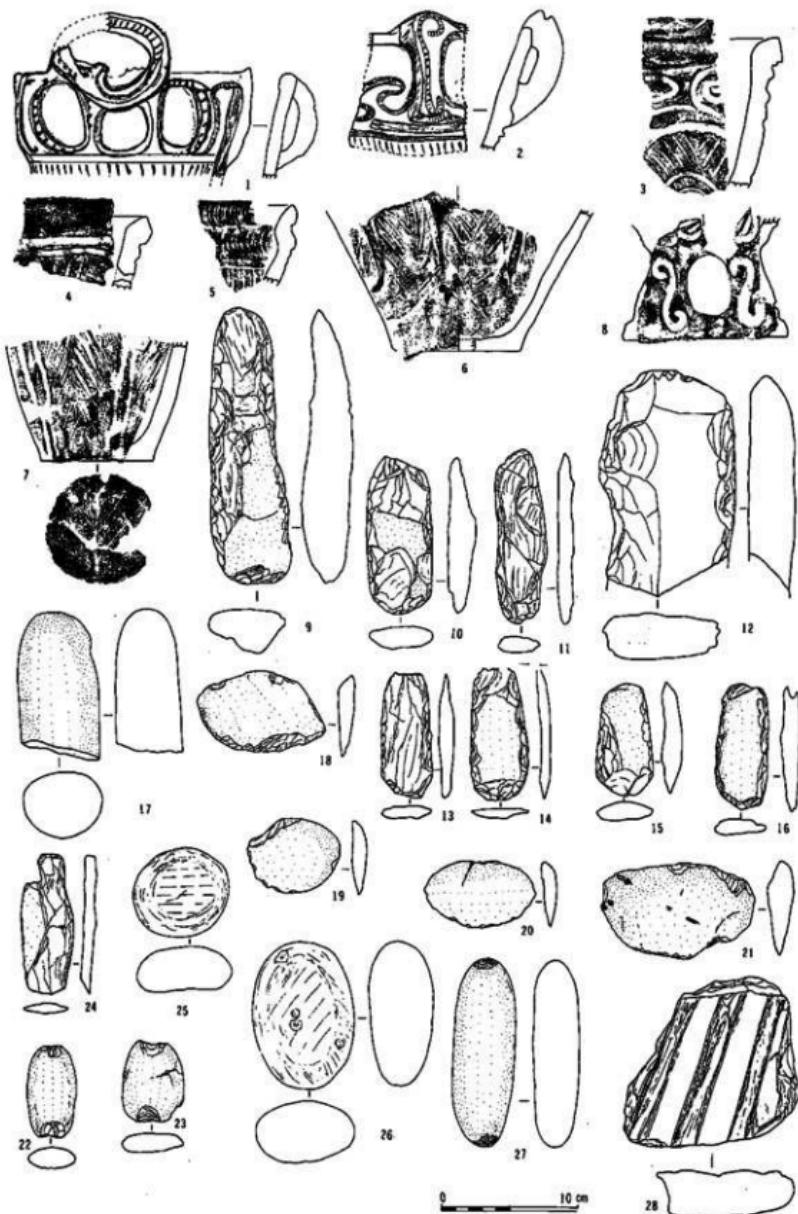
1~20·31~34···上
23~30·35~39···下

第23图 郭遗址24号住居址出土遗物

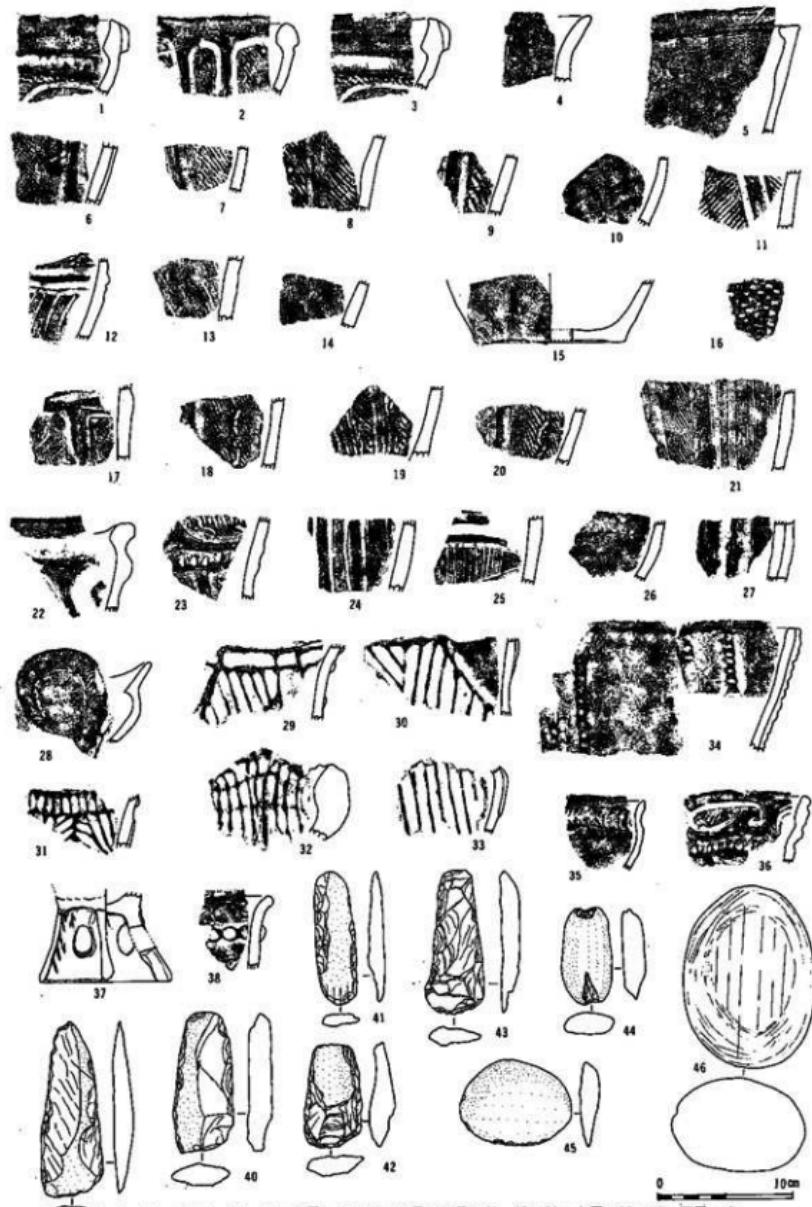
0 10cm



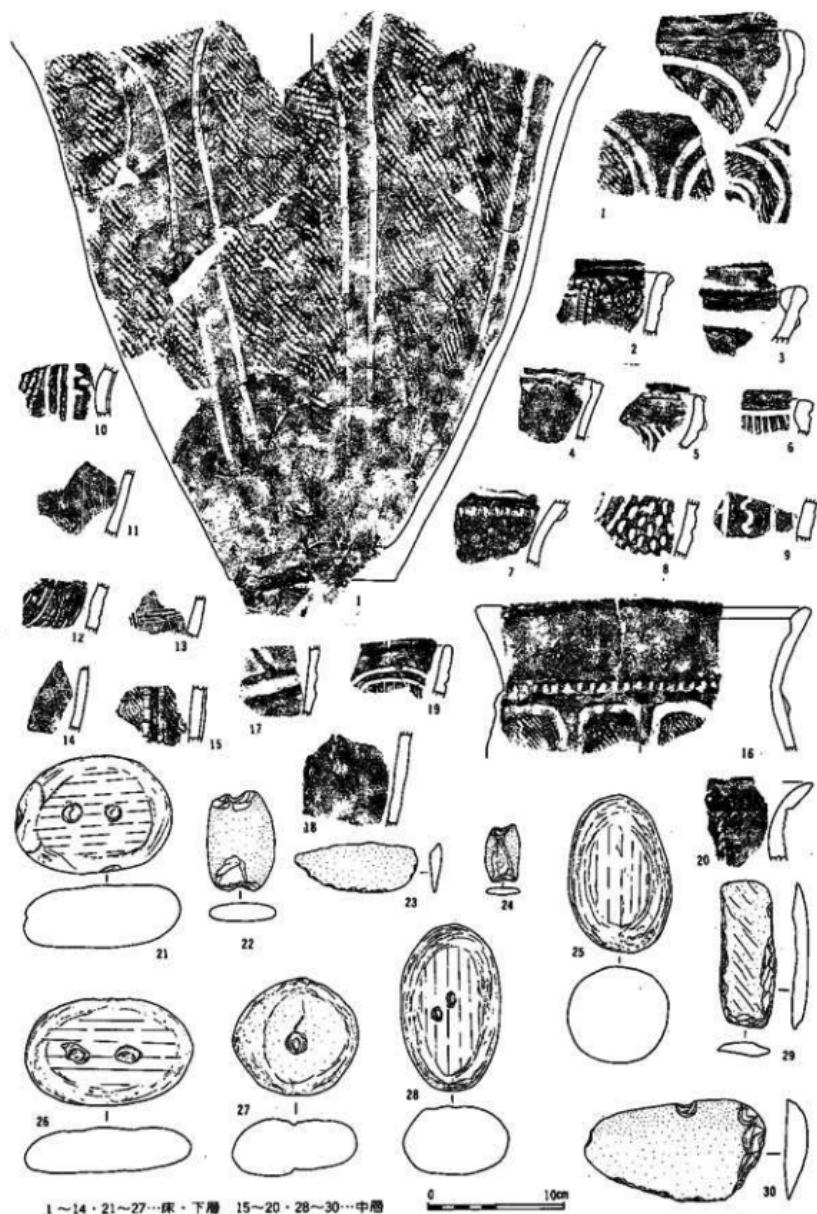
第24図 韶遺跡25号住居址出土遺物（I）



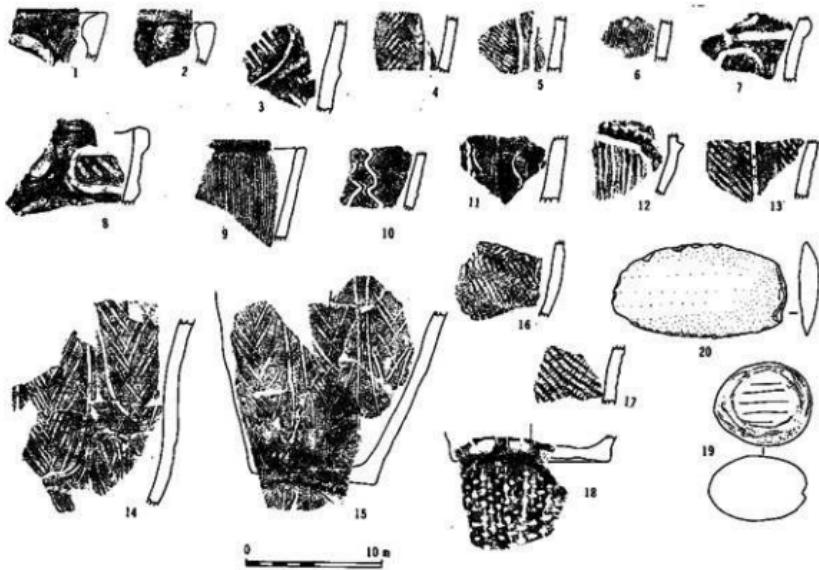
第25図 郭造跡25号住居址出土遺物（II）



第26図 郡遺跡26号住居址出土遺物



第27圖 郭遺跡27號住居址出土遺物

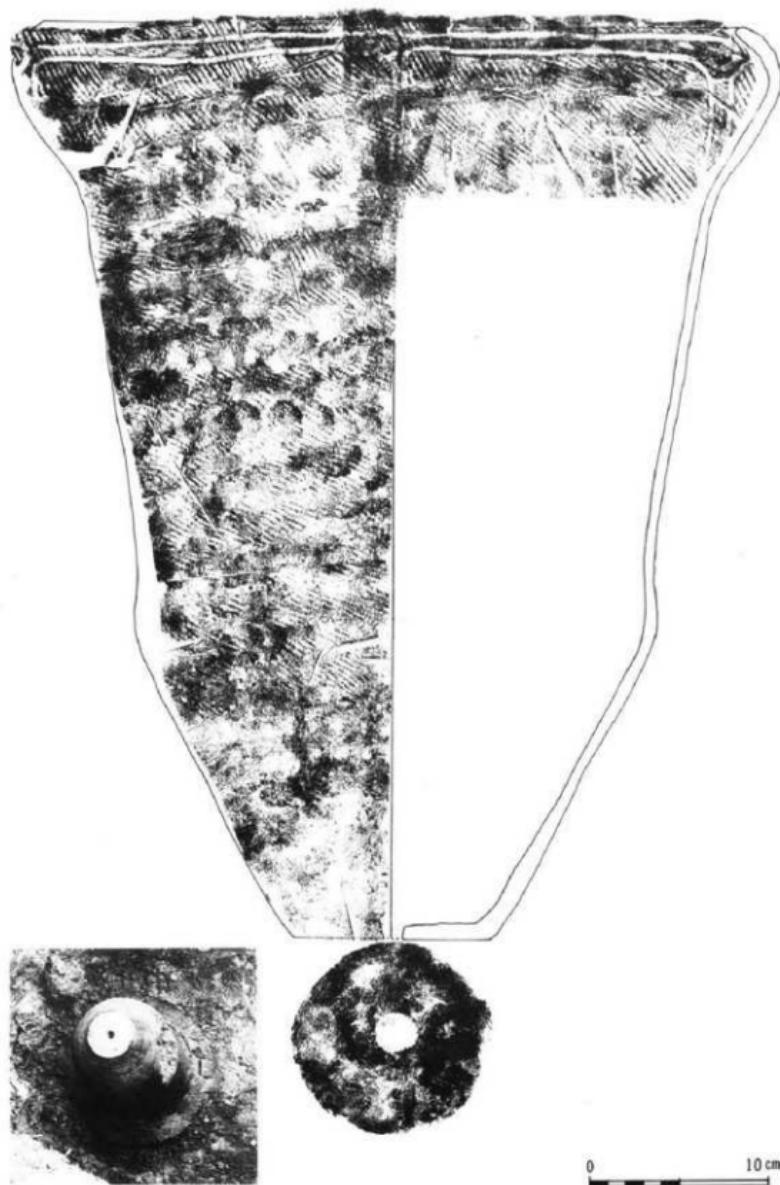


1~7…14住，8~20…19住

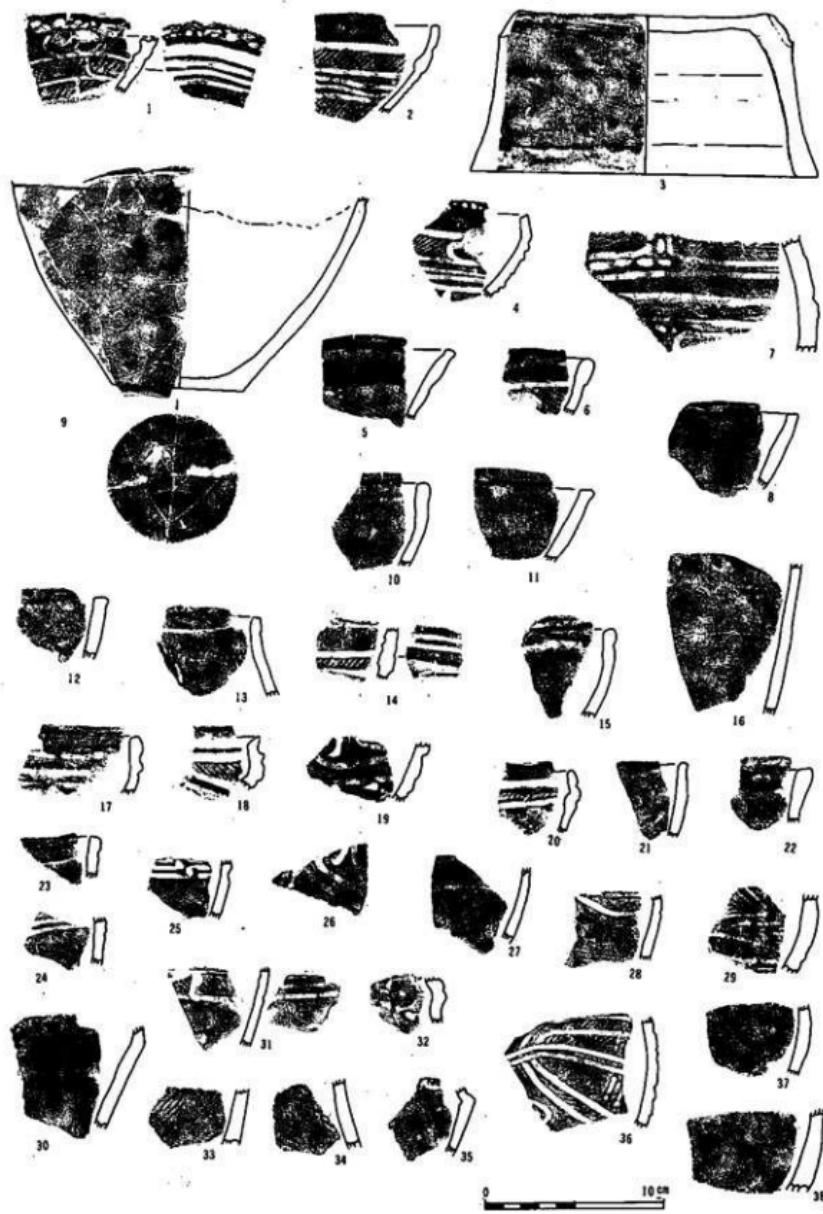
第28图 郭造跡14号·19号住居址出土遺物



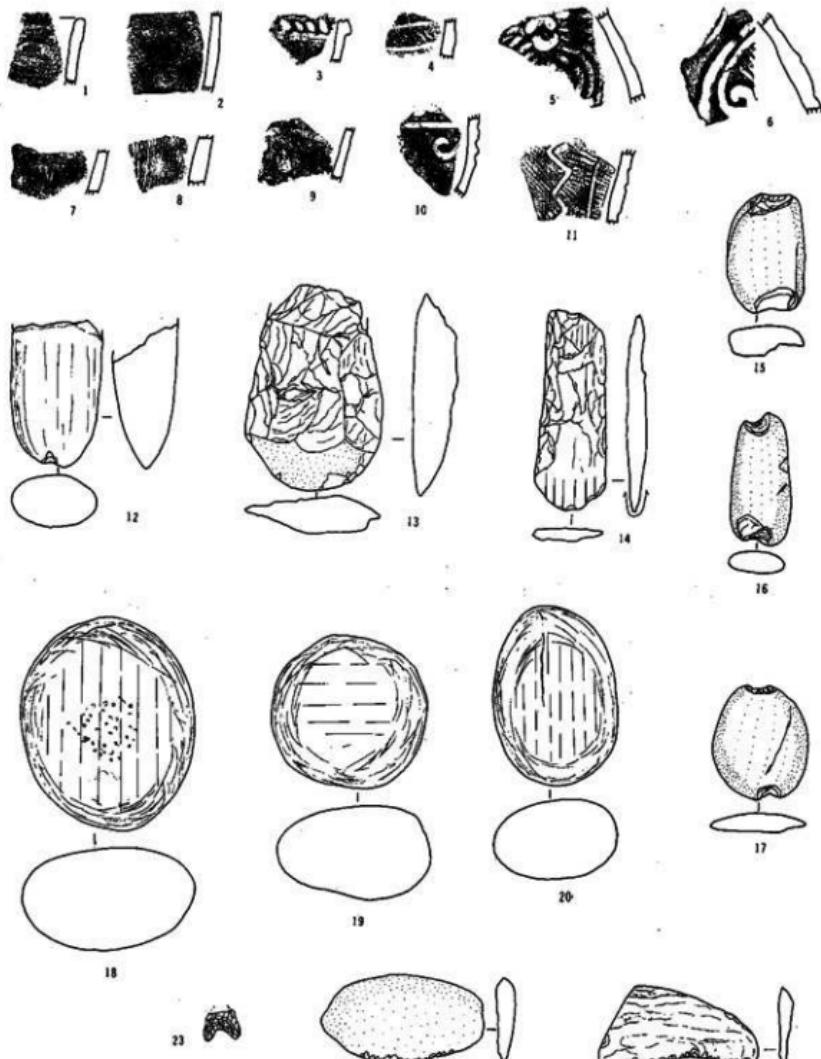
第29图 郭造跡土壤I·II·III号，造構外出土繩文中期後半遺物



第30図 郭遺跡北公民館南側用地境際出土伏甕

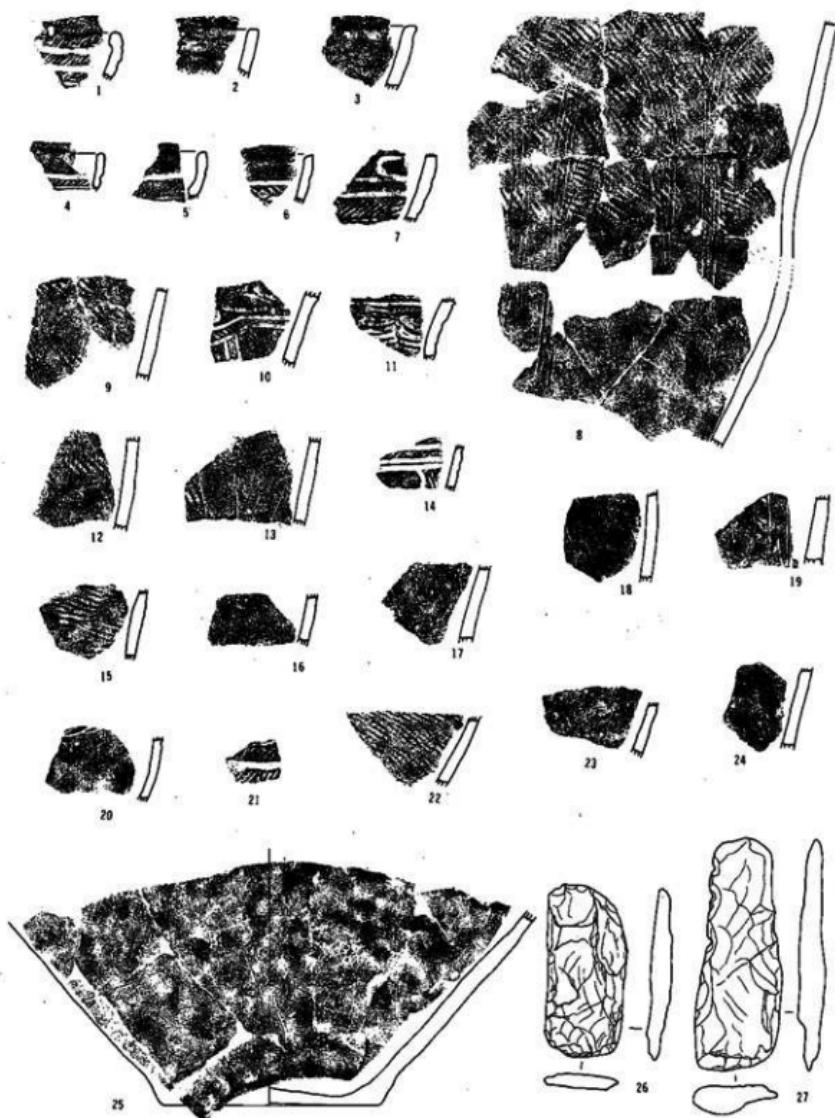


第31図 郭遺跡15号住居址出土遺物（I）



1~11…上層出土, 12·13·18~20…中層, 14~17·21~23…床出土

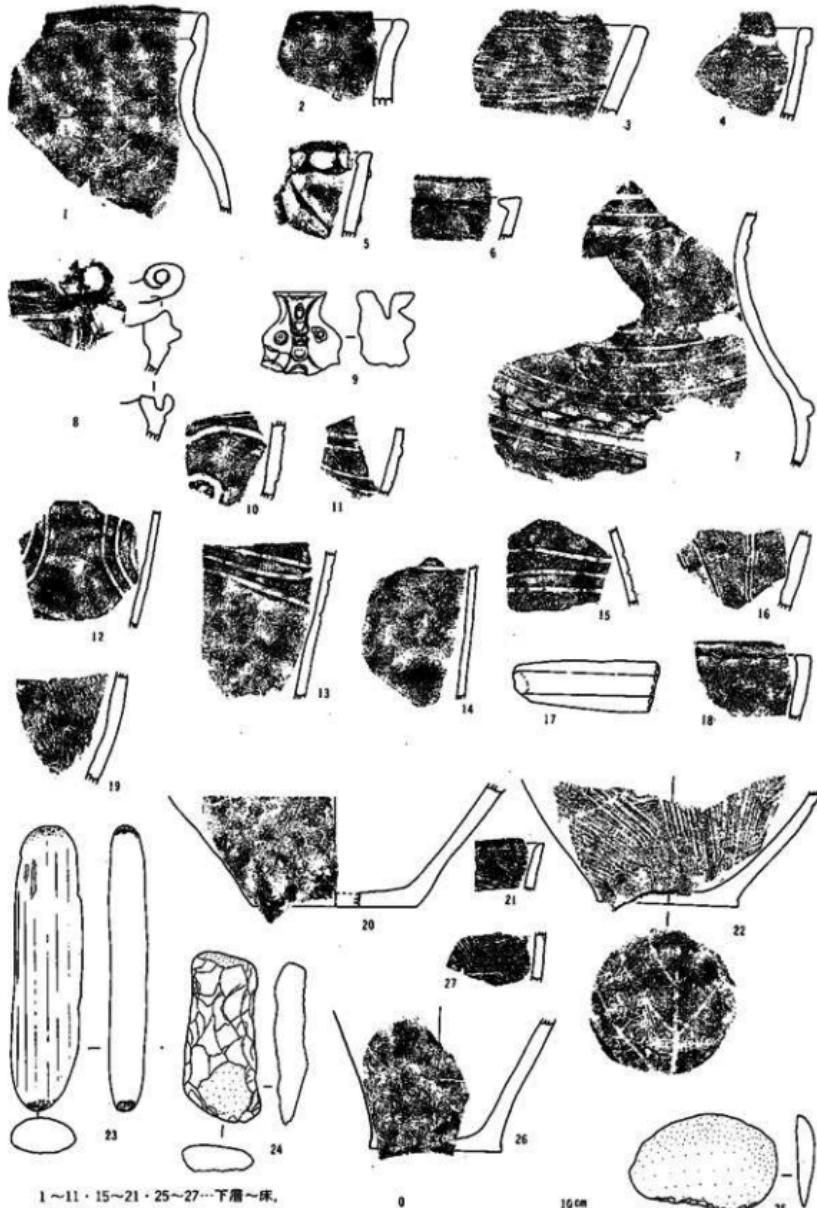
第32圖 郭達跡15號住居址出土遺物(II)



18・19…炉址, 23・24柱穴円

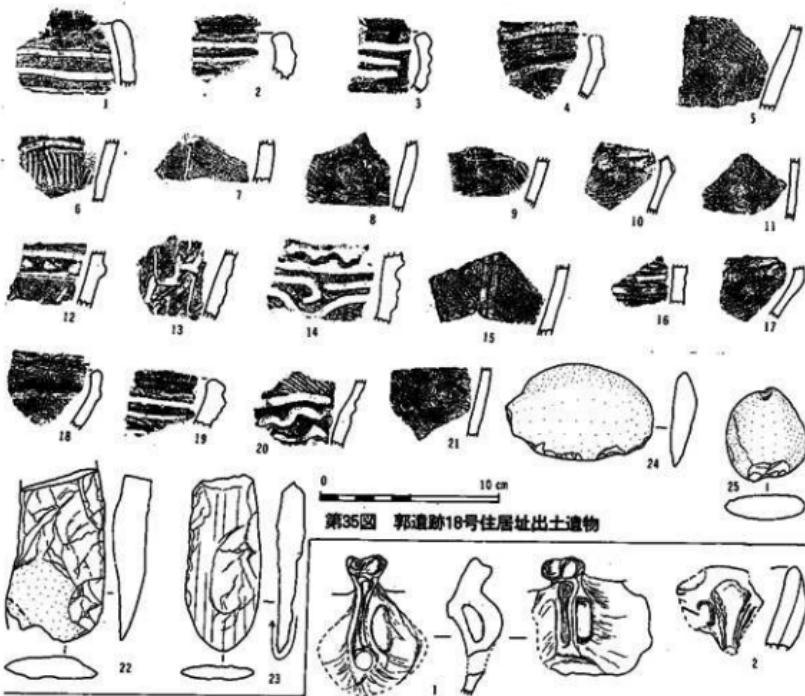
0 10 cm

第33図 郭遺跡16号住居址出土遺物

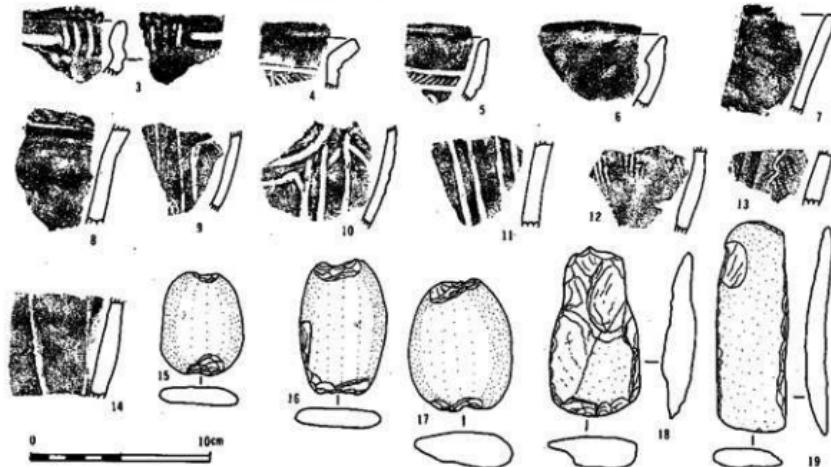


1~11·15~21·25~27…下層～床。
12~14·22~24…上層・中層

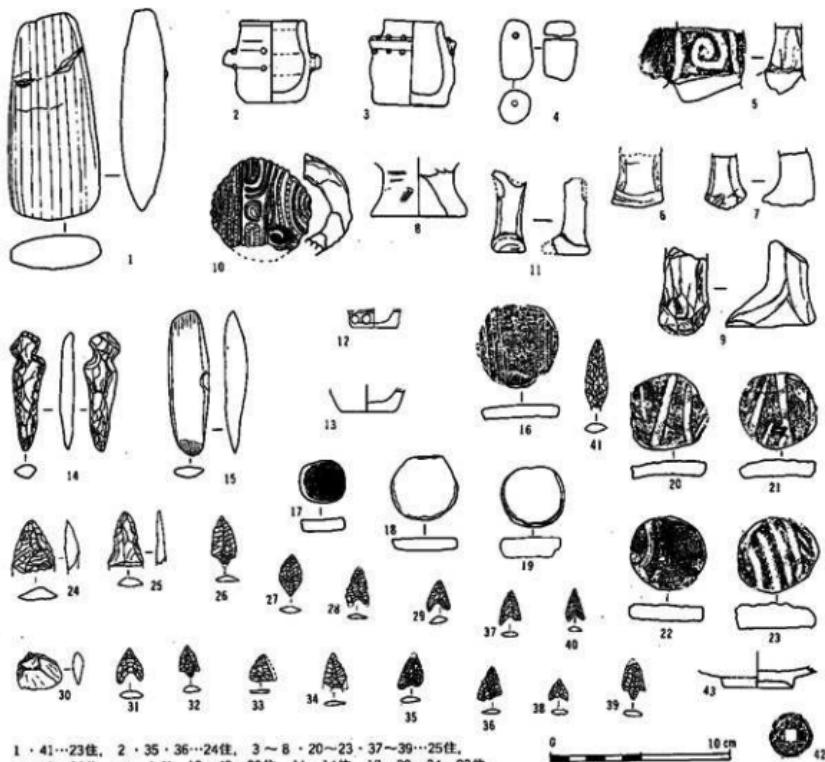
第34図 郭遺跡17号住居址出土遺物



第35圖 郭遺跡18號住居址出土遺物

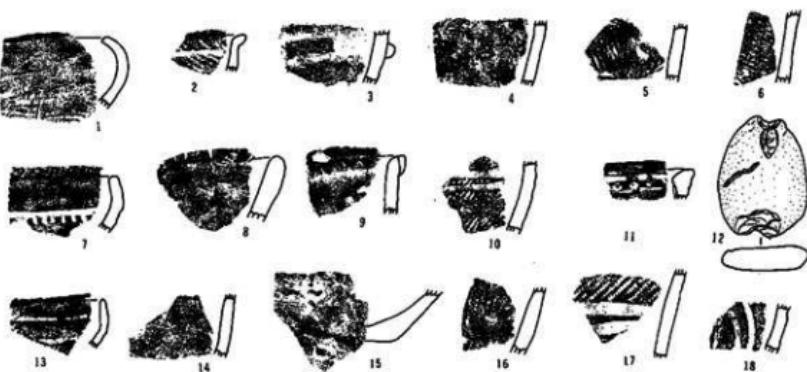


第36圖 郭遺跡28號住居址出土遺物



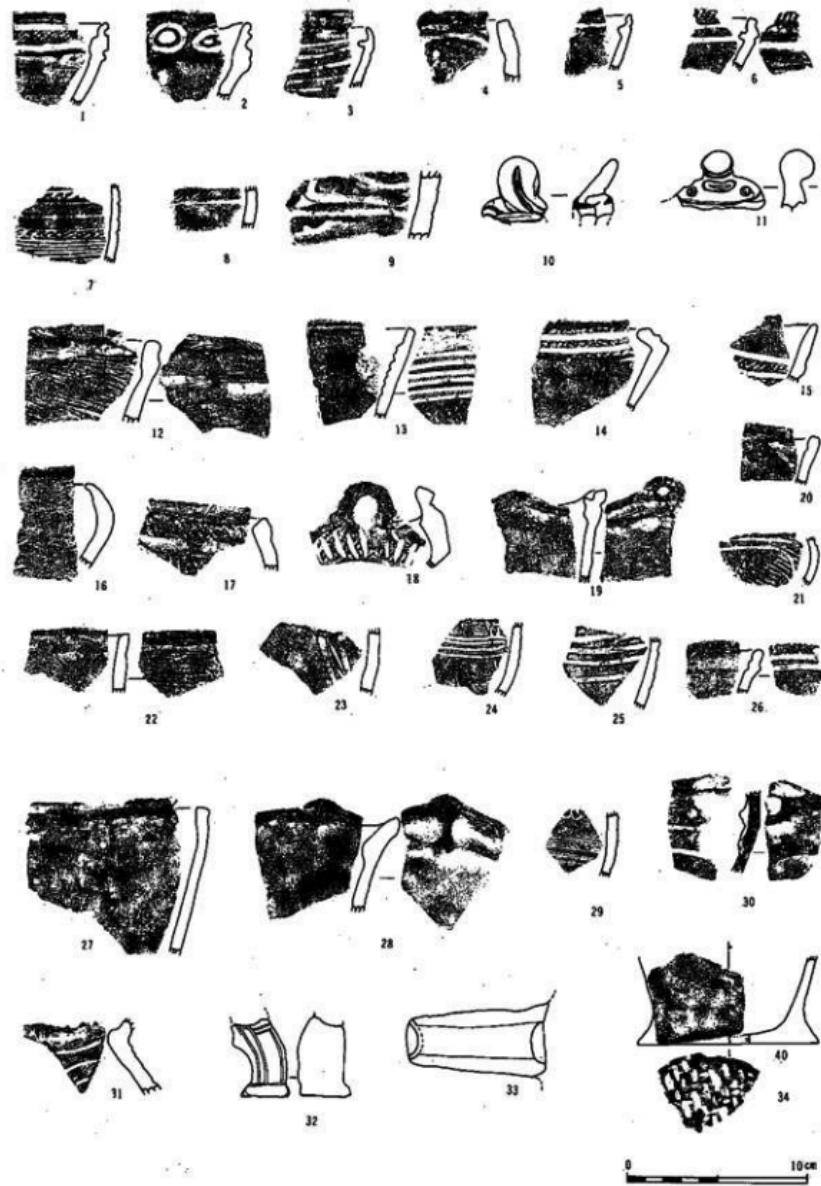
1·41~23住, 2·35·36~24住, 3·8·20~23·37~39~25住,
9·18~26住, 14~土II, 10·40~28住, 11~14住, 12·30~34~22住,
29~18住, 13~19住, 7·15·25~20住, 16·17~17住, 13~19住,
28~21住, 24~16住, 26~12住, 28·29~11住, 42·43~24住北侧

第37图 郭造跡出土小型遗物



1~6~11住, 7~12~12住, 13~18~13住

第38图 郭造跡11号·12号·13号住居址出土遗物



第39圖 郭遺跡遺構外出土繩文後期遺物

IV 郭遺跡発掘調査出土石器一覧表（表1）

打…打石斧、横刃…横刃形石器
 硬…硬砂岩、凝…凝灰岩
 黒…黒曜石、粘…粘板岩、玄…玄武岩
 砂…砂岩、輝…輝緑岩、敲…敲打器

遺 跡 編 號	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺 跡 編 號	図 番 号	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考
20 住	1	馬頭面製	凝	11.5	3.6	195	縁に付ける縁は鉄器によるとみる。上層 上凹	22 住	20	横刃	凝	3.0	6.9	20	伊址北 16号住よりの混入 とみる。 “ “
	2	砥石	砂	10.5	3.1	132			21	“	砂	6.9	4.9	70	
	3	打	凝	10.6	5.4	104			22	石盤	凝	7.6	5.2	82	
	4	“	“	11.1	4.6	100			23	石皿	花	13.3	22.1	3960	
	5	“	“	11.5	3.5	115			24	スクレ ーパー	黒	1.7	2.5	—	
	6	“	粘	8.3	3.7	58			25	石鎌	チャート	1.9	1.3	—	
	7	“	凝	9.7	5.6	105			26	“	黒	1.7	1.0	—	
	8	“	硬	11.4	5.1	175			27	“	“	1.4	1.1	—	
	9	“	凝	11.2	4.7	170			28	“	“	2.0	1.2	—	
	10	“	“	19	6.5	455	刃部欠け	23 住	22	磨石斧	凝	9.0	2.5	43	伊址北 16号住よりの混入 とみる。 “ “
	11	磨石斧	“	11.3	5.2	492			23	打	硬	11.5	6.1	155	
	12	敲	“	14.7	5.1	595			24	“	輝	12.0	5.7	130	
	13	横刃	硬	4.4	8.7	45			25	石鏡	“	5.7	4.9	95	
	14	“	“	6.2	8.2	52			26	“	皮磨岩	5.6	3.0	31	
	15	“	“	7.4	7.5	160			27	“	硬	7.4	3.7	78	
	16	“	“	4.0	6.4	30			28	横刃	“	4.1	8.2	40	
	17	“	“	5.3	7.5	48			29	“	“	6.9	10.0	190	
	18	“	“	4.0	6.9	15			30	磨石	花	10.7	11.0	1250	
	19	“	“	4.7	8.3	65			31	“	“	9.5	10.7	655	
	20	磨石	花	9.0	9.0	420			32	“	“	8.6	11.3	790	
	21	石鎌	硬	4.6	3.5	34			33	“	“	8.5	9.2	576	
	22	石鎌	硬	4.0	2.9	18			34	石皿	“	17.0	8.3	2440	
	23	“	“	5.7	4.3	34			35	磨石斧	輝	11.0	5.0	252	
	24	打	凝	11.8	4.0	173			36	石鏡	玻璃質 安山岩	3.7	1.3	—	
	25	“	“	9.3	3.4	6	西壁にのる 風化すむ 中通	24 住	37	打	蛇文岩	15.0	4.4	185	敲打器？
	26	凹石	花	9.0	9.5	485			38	“	凝	13.5	6.4	435	
	27	“	“	7.2	9.4	425			39	敲	“	9.0	4.9	255	
	28	磨石	“	8.4	9.7	845			40	横刃	硬	5.5	7.0	38	
	37	磨石斧	粘	7.8	1.7	22			41	“	“	6.4	9.0	84	
22 住	25	尖頭器	玄	3.0	1.4	4			42	石匙	“	9.5	4.5	74	
	20	打	硬	11.3	4.7	122			43	石鎌	“	5.3	4.0	41	
	21	“	“	7.0	3.2	35			44	石鏡	黒	1.9	1.1	—	
	22	石鎌	砂	4.7	3.3	36			45	石鎌	黒	1.8	1.0	—	

追 記 機 器 番 号	No.	器 種	材 質	長 さ cm	幅 cm	重 量 g	備 考	追 記 機 器 番 号	No.	器 種	材 質	長 さ cm	幅 cm	重 量 g	備 考	
25 住	9	打	凝	19.9	5.5	628		27 住	27	"	安山	8.6	9.0	565		
	10	"	"	11.4	4.7	185			28	"	片巖岩	12.0	7.8	760		
	11	"	"	12.7	3.2	76			29	打	粘	10.5	3.8	60		
	12	"	玄	15.6	8.3	870			30	横刃	硬	7.3	13.3	183		
	13	"	凝	9.0	3.7	52										
14	"	硬	9.0	4.2	49			18 住	35	横刃	硬	5.2	8.0	60		
	15	"	凝	8.0	4.2	70			25	石鍤	硬	4.9	4.4	46		
	16	"	硬	9.0	3.8	80			19 住	19	磨花	4.9	7.2			
	17	石棒	花	10.4	5.8	570			20	横	硬	6.9	12.7	150		
	18	横刃	硬	6.0	9.0	78										
	19	"	"	5.3	6.0	42			28 住	36	石鍤	硬	5.8	4.4	50	
	20	"	"	4.7	8.1	50			16	"	"	7.4	4.8	72		
	21	"	"	7.0	11.0	170			17	"	"	7.2	5.5	126		
	22	石鍤	粘	6.7	3.4	55			18	打	"	9.2	4.9	86		
	23	"	硬	5.8	4.4	86			19	"	"	11.6	3.9	85		
	24	石匙	チャート	10.2	3.3	50										
	25	磨石	花	6.4	7.0	340			15 住	32	磨石芯	輝	8.0	4.7	225	中層基部折れ
	26	凹石	"	10.5	7.2	600			13	礫器	硬	11.1	7.7	280	基部折れ	
	27	敲打	輝	13.5	4.2	355			14	打	凝	10.7	3.9	78	床	
	28	砥石	砂	12.0	10.0	680			15	石鍤	硬	6.5	4.2	60	"	
	29	石鍤	黒	1.7	0.9				16	"	"	7.3	3.2	52	"	
	30	"	"	1.2	0.9				17	"	"	6.3	5.3	51	"	
	31	"	"	2.0	1.1				18	磨石	"	11.8	6.5	845	中層	
	32	打	凝	12.5	4.4	100			19	"	花	8.5	8.5	535	"	
26 住	39	"	硬	10.0	4.3	100			20	"	"	9.8	6.8	433	"	
	40	"	硬	9.2	2.8	50			21	横刃	硬	4.8	9.0	56	床	
	41	"	"	7.6	4.2	72			22	"	凝	4.3	8.8		"	
	42	"	"	10.5	4.0	83			23	石鍤	黒		1.9		刀部欠け	
	43	"	凝	6.6	3.8	70										
	44	石鍤	硬	6.2	8.2	80			16 住	33	打	硬	9.5	4.1	72	
	45	横刃	"	13.3	9.8	1380			27	"	"	7.9	4.6	105		
	46	磨石	花	7.8	12.2	665			37 住	24	尖頭器	黒	3.0	2.2	4	基部欠け
27 住	21	凹石	"	8.6	11.5	750			17 住	34	敲打	輝	15.8	4.6	225	
	22	石鍤	輝	7.3	4.9	77			24	打	硬	9.0	4.0	107		
	23	横刃	硬	3.5	8.9	30			25	横刃	"	5.1	8.2	50		
	24	石鍤	凝	4.2	2.5	15										
	25	磨石	砂	11.4	7.4	960			12 住	38	石鍤	硬	6.5	4.9	70	
	26	凹石	硬	7.8					37 住	26	石鍤	黒	2.6	1.3		
									川住	28	"	"	1.8	1.1		
									29	"	"	1.6	1.0			
									土川	29	横	硬	5.0	7.7	53	
									39 住	14	石匙	玄	6.5	1.2	10	

IV まとめ

郭遺跡は、帰牛原北面の段丘崖下にある標高約428mの狭い段丘面にある。西と北は北高10mの低い緩やかな段丘崖があって、崖下には阿島の町が南北に広がっている。東側は緩い扇状地が300mほど三角にのびて、加々須川の崖となって終っている。最も幅の広い西側で150m位であり、この東面する小台地に遺跡がある。

南の堀原段丘面は繩文中期と弥生中・後の集落が調査され、また方形周溝墓群が知られている。遺跡の西端には竜東地区唯一の前方後円墳があり、南側には消滅した郭2号があって、多くの馬具の出土は注目され、段丘の上方の郭5号墳より完形の円筒埴輪2個の出土をみ、その1個は、朝顔花形円筒埴輪である。

加々須川を隔てた冲積下段丘面にある阿島遺跡は、弥生中期阿島式土器の標準遺跡として広く知られている。加々須川を隔てた北の段丘面は弥生後期の遺跡であり、大正11年鳥居博士が発掘調査し注目され(図版IIの1)、また知久氏の支城原城址がある。郭は、その名の由来する知久氏の居館のあった所で、知久氏は竜東一円を支配したが武田の進攻に敗退し、徳川家康によって一時は滅亡したが、家康の江戸幕府を開くにあたり、知久氏は旗本としてここに館を構えた。

このような自然的・歴史的環境に郭遺跡は立地している。

郭遺跡に最初の調査が行われたのは、大正11年（1922）11月鳥居龍藏博士によってである。教職員・児童の手で発掘され、多くの土器片・石器（図版IIの2）の出土をみ、鳥居博士は「大門原・姫原天伯堂に喬木村阿島第一小学校校庭とを加え、先史時代の本郡三大遺跡と称することが出来よう。」と、「下伊那の先史及原史時代 鳥居龍藏 大・13」に述べている。

この時の調査以来70年近くの間調査は行われず今日に至った。この間、小学校の運動会のゴミ捨て穴を掘った際に伏櫪(図版IIの3)の出土をみ、また理科園の作業中に土器片が採集されたことがある。

今次平成4年(1992)、特別養護老人ホーム重木荘の建設に伴う発掘調査が実施された。

調査結果、住居17軒が検出調査されたが、4軒は、3年度試掘調査によって検出されたが、体育館撤去の工事によって、踏かたもなく失われた。

造構は、二箇所に集中検出され、一つは用地北東端部と、他は保育園の運動場にかかる用地西側の一部に限られていた。

体育馆あとは、北東部の僅かに跡地にかかる一部以外は、建物の破壊とその後の建物材の片付けは重機によって行われ、それによる造構の破壊は大きく、また、調査によって発見された縄文後期以後とみる加々須川の氾濫による土石流の跡は第2図にみると広い範囲にみられ、造構の消失には大きかったことが、土層調査によってうなずけるものがある。第2図にみると、住居址の検出された位置と、自然と人工による破壊の跡が確かめられる。

調査された住居址は、遺構、遺物の状態から大きく二時期に分けられる。前者は縄文中期後半II・IIIがあり、後者には縄文後期中葉加曾利B式を主体とするものである。

これらの住居址の遺物の出土状況をみると、新旧上下が逆になっているものが多く、その識別に苦労させられた。

江戸時代初期 旗本知久氏の館建設、昭和4年の小学校校舎の建築、昭和28年の現北公民館位置に8

教室の新校舎建築と、その以前に行われた運動場の拡張整備事業等があり、上段の緩傾斜地よりの土の運搬・削平等により、運ばれた土中に遺物が混じって、遺構内に混入されたものとみる。

縄文中期後半の土器は、下伊那独自の土器を主体とし、下伊那各地でみられている東海系の土器が、本遺跡の他、伊久間原、帰牛原遺跡等の大遺跡の中にもみられないことに地域の自然環境によるものか、今後の問題である。

縄文後期中葉の土器は関東系を主体とみられているが、遺構外の土器に巻貝側面圧痕文がみられ、東海系の後期後半の土器であり、この期の遺構の存在も予想される。

縄文草創期の有舌尖頭器とみる石器2点の出土を住居址内にみているが、この期の遺構の存在も予想される。

知久氏館に関連する遺物は、24号住の北側より、小皿片と紹聖元宝の出土した以外にはみられていない。弥生中期前半の住居址が、保育園プールの建設工事の際に2軒の住居址の一部が確認されており、青木村誌に記載されている。

郭遺跡の大部分は、土石流による堆積と、築造物によって消滅しているが、残る遺跡は保育園の運動場と南側にある田畠であり、今後の保存に注意を向けたい。

今次調査は、多くの課題を今後に残すものであり、多くの誤りもあると思われ、大方のご批判、ご教示をお願いいたしたい。

（佐藤 駿信）

図版 I 遺 跡



旧喬木第一小学校体育馆と周辺……老人ホーム建設地



旧喬木第一小学校体育馆……老人ホーム建設地



大正11年7月28日鳥居龍藏博士
喬木第一小学校校庭調査
土器出土状態 (市村先生撮影)
下伊那の先史及び原史時代より



大正11年7月 鳥居博士 城原遺跡の調査：左が博士



昭和48年 伏妻出土



調査以前出土 伏妻



旧苗木第一小学校体育馆を
壊した跡



知久氏茶室（暉月庵）と
前面は運動場からの砂礫層



体育馆跡に完成した老人ホーム

図版II 遺構群



用地南西 運動場検出住居址群（手前より 15住、25住、19住から北へ）

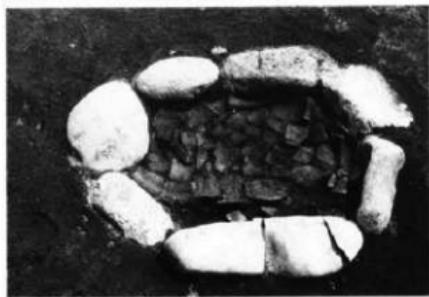


用地北東部住居址群から西を見る

図版III 遺構・遺物……縄文中期後半



20号住居址



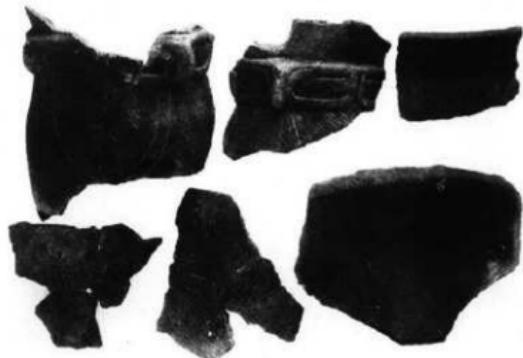
20号住居址
炉 址

20号住居址
出土土器





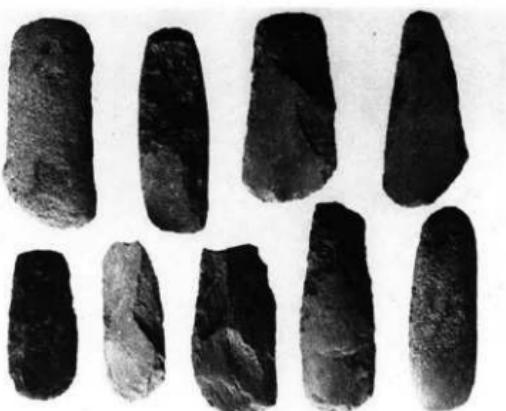
20号住居址出土
深 鉢



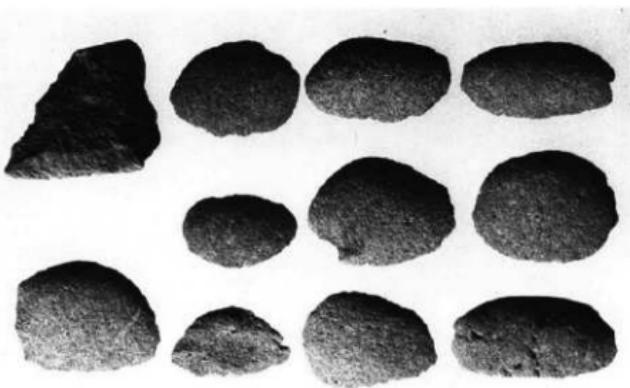
20号住居址出土
土 器



20号住居址出土
土 器



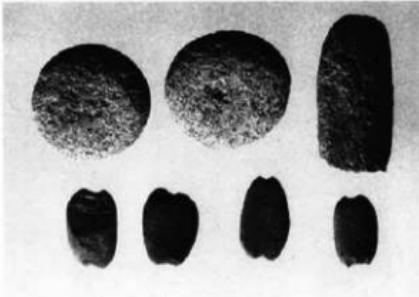
20号住居址出土
石器
(右下……局部磨石斧)



20号住居址出土
横刃形石器



20号住居址出土石器 (上右…大形打石斧, 中…敲打器)



20号住居址出土 石器



22号住居址



22号住居址 炉 址



22号住居址出土 土 器



22号住居址出土 石 盘



22号住居址出土石器と黒曜石破片



23号住居址



23号住居址出土 磨製石斧



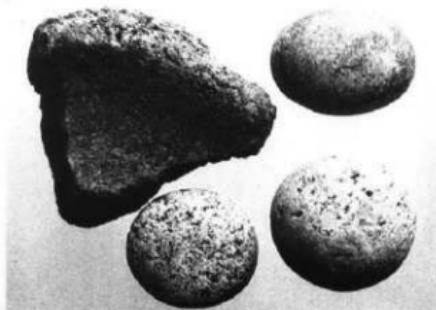
23号住居址出土 深 舀



23号住居址出土 土 器



23号住居址出土石器 (下右…局部磨製石斧)



23号住居址出土 石皿と磨石



24号住居址（南から）



24号住居址 炉 址



24号住居址出土 土 器



24号住居址出土石器（下左……石匙）



24号住居址 ミニニア土器出土



25号住居址



25号住居址 遺物出土状況 石棒あり



25号住居址 土錐出土



25号住居址
土器出土状況



25号住居址出土 埋甕断面調査



25号住居址出土 埋甕の検出



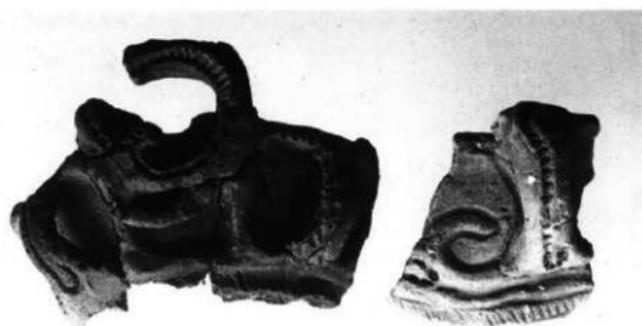
25号住居址出土
埋甕



25号住居址出土 土器



25号住居址出土 深鉢



25号住居址出土 土 器



25号住居址出土 土 器



25号住居址出土 石 器



25号住居址出土石器（上段左より3は砾石）



26号住居址，
上 27号住居址



26号住居址出土遺物（中段右端 石匙，次は土偶脚）

26号住居址出土 石 器



19号住居址



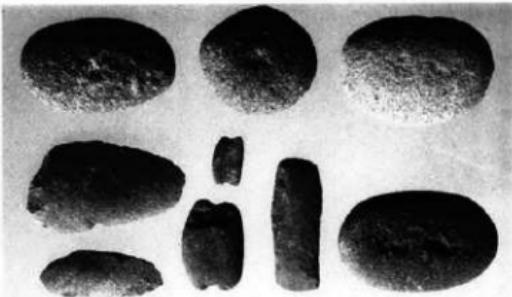
27号住居址・土壤II・III号（前が土III）



27号住居址出土 土 器



27号住居址出土 土 器



27号住居址出土 石 器

図版 IV 遺構・遺物……縄文後期



15号住居址



15号住居址
中層の集石群



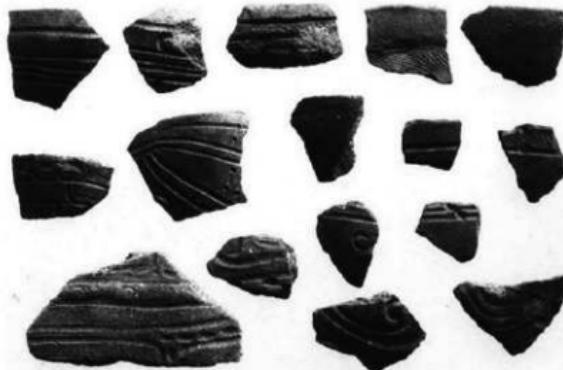
15号住居址 断面調査



15号住居址出土 器 台



15号住居址出土 器 台



15号住居址出土 繩文後期土器



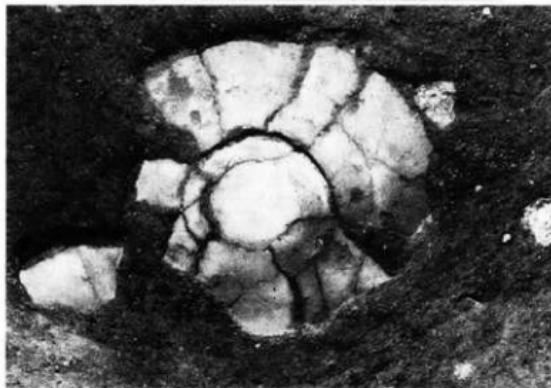
15号住居址出土 浅 鉢



15号住居址出土 石 器



16号住居址



16号住居址出土
浅鉢



16号住居址出土
縄文後期土器・石器



17号住居址



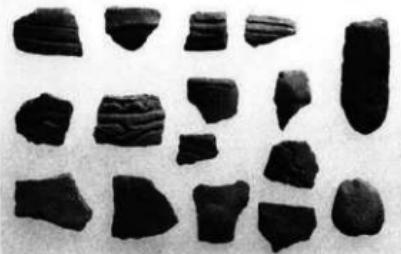
17号住居址 出土遺物



17号住居址出土 繩文後期・後半土器



18号住居址



18号住居址出土 土器・石器



28号住居址

(上は20号住 炉址)



28号住居址出土

土 器



28号住居址 土器出土状態



土壙 1号

図版 V 小形遺物及び遺構外出土遺物

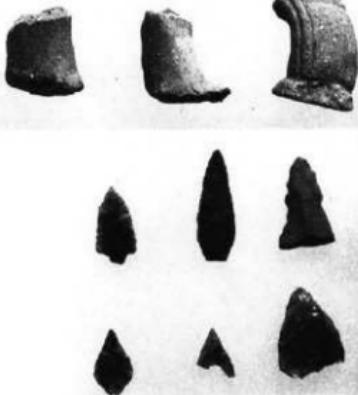
小形土器 (左…24件)
 ・土鍾 (中…25件)
 ・土鉢 (右…28件)



土偶 上…胸部 (25件)
 ・脚部 左 (25件)
 ・右 (用地北東部)

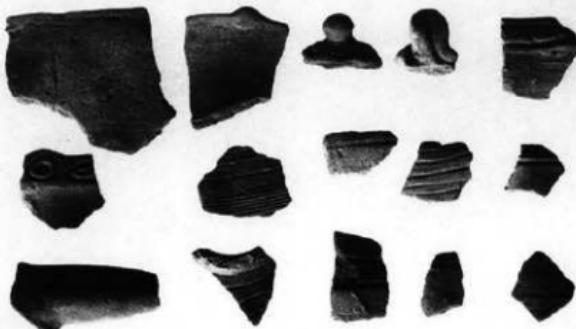


郭遺跡出土小形遺物
 左 磚石 (20件), 土製円板, 中上下 4 個 (25件), 下左 (17件)
 小形土器底部 右上 (22件), 右中 (18件)



石錐・尖頭器 ?

上段左 (12件), 中 (25件)
 右 (20件)
 下段左 (18件), 中 (25件)
 右 (26件)



郭遺跡用地北東上層出土 橋文後期土器

図版VI
発掘スナップ



調査にかかる



遺構検出



住居址の調査



試掘調査検出遺構

調査組織

1. 郡遺跡調査委員会

中川 煉	喬木村教育委員会委員長(前)
鈴川 英人	" (現)
下岡 重尊	喬木村教育長
桐生 文雄	喬木村教育委員
東原 美寅	"
小池 吉郎	"
原 五郎	喬木村文化財保護委員会委員長
黒川 良一	喬木村歴史民俗資料館専門主事

2. 調査団

団長	佐藤 鮎信
調査員	牧内 住子
調査補助員	松下 真幸
"	田口 さなゑ

3. 作業員 細口 七郎 原 隆司 山田 康夫

依田 時子	木下 喜代恵	松尾 研	松永 悅
小林 鮎一	吉川 匡雄	後藤 和産	佐藤 正博
佐藤 澄子	多田 昭	吉岡 左苗	大平 光
佐藤 いなえ			

4. 指導 長野県教育委員会 文化課

5. 事務局

柳沢 治人	喬木村教育委員会事務局(前)
宮下 喜善	" (現)
市瀬 武文	" 社会教育係長(前)
吉川 文人	" " (現)
原 俊道	" 社会教育係

阿島郭遺跡

特別養護老人ホーム喬木荘建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1993・8

下伊那郡喬木村教育委員会

印刷 岩田市通り町 (株)秀文社
